第17回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業
研 究 報 告

イタリア社会派推理小説の成立過程における松本清張作品の受容について

―『霧の会議』とレオナルド・シャーシャ―

立命館大学大学院博士課程　吉村　法子

北九州市立
松本清張記念館

目次

序論
第１章 イタリアにおける松本清張作品の受容
　第１節　現地調査と結果
　第２節　翻訳『点と線』への反応―「時刻通り」への驚き―
　第３節　切れ長の目のメグレー日本文学翻訳事情―
　第４節　ジャーナリズム界が見た松本清張

第２章　イタリア推理小説と知識人
　第１節　イタリア推理小説のはじまり
　第２節　推理小説論の隆盛
　第３節　1990 年代の作品群

第３章　松本清張とレオナルド・シャーシャの相似性
　第１節　『トード・モード』で描いた戦後イタリア政治
　第２節　宗教的蠱惑の普遍性と聖職者へのまなざし
　第３節　冷戦構造を描いた文学

序論

現代イタリア文学界において松本清張の作品が翻訳・刊行されているが、日本ではほとんど知られておらず、また受容の全貌が把握されていない。一方では松本清張のイタリアにまつわる作品として『霧の会議』(1984 年)があるが、他の作品に比べて研究が少ない。馬場康夫の「『霧の会議』の背景」(2009 年) と、高橋敏夫の「少しずつ、グローバルな霧と闇へ／から―『霧の会議』という企て」(2016 年) がある。そこで本稿では「松本清張とイタリア」をテーマに論じていきたい。

第 1 章で取り上げるのは、いままで全容が把握されていなかったイタリアにおける松本清張作品の受容についてである。松本清張の名がいかなる形でイタリアに流入し社会的意味を持ったのかを探る。筆者の行った調査によると、翻訳作品、映像作品、新聞掲載記事など、多様な形でイタリア社会に入り込んでいる。イタリア人がどのような反応を松本清張作品に起こしたのかを知る手がかりとして、以下の事項に焦点をあてて見ていく。(1) 現地調査とその結果を記す。(2) 1971 年に初めて翻訳された『点と線』のイタリア語タイトルが、なぜ『死は時刻通り *La morte è in orario*』になったのか。イタリア人の鉄道事情や時間に対する文化的概念を交えて考察する。(3)『死は時刻通り (原題：点と線)』の書評で、松本清張の創り出した探偵は「切れ長の目のメグレ警部 un Margret dagli occhi a mandorla」と表現された。この表現に隠れているイタリア人の認識とはどのようなものであったか。イタリアにおける日本文学翻訳事情の観点から見ていく。(4) 松本清張の名前は新聞紙面に幾度か登場しているが、文学の世界とはまた異なり、現代日本を知る重要な作家として認識されていたことが考えられる。イタリアの全国紙に掲載されたベトナム戦争関連記事 (1968 年) や特集「黒い霧の国」(1973 年) を中心に、イタリアのジャーナリズム界が松本清張をどう見ていたのかを考察していく。

第 2 章では推理小説と知識人との関係を、イタリアにおける推理小説史、イタリア人による推理小説論、1990 年代に登場した著作から考察していく。イタリアにおいて推理小説は 1960 年前後から推理小説作家ばかりではなく、純文学の作家たちによってもその手法が使われるようになった。イタリア推理小説には外国製推理小説、国産推理小説、知識人の描く推理小説がある。外国製推理小説とは 1929 年創刊の老舗ミステリー叢書イル・ジャッロ・モンダドーリ叢書 (Il giallo Mondadori) に代表される分野であり、海外の名だたる推理小説を翻訳してきた。国産推理小説は長らく外国製に圧されて発展してこなかった分野である。1960 年代に入って、ようやくジョルジョ・シェルバネンコ[1]のような作家が成功を収めた。推理小説の隆盛は犯罪や汚職などの社会問題と直結しており、イタリアの経済発展とともに推理小説が生まれる社会環境が成立したともいえる。イタリア製推理小説が国際的に成功を収めているとすればここ 20 年ほどのことであり、アンドレア・カミッレーリ[2]のモンタルバーノ警部シリーズの登場によって、ようやくシャーロック・ホー

[1] Giorgio Scerbanenco (1911-1969) キエフ生まれ。ウクライナ人の父とイタリア人の母のあいだに生まれ、イタリアで育つ。イタリアにおけるハードボイルドのジャンルを確立した。

[2] Andrea Camilleri (1925-) シチリア島ポルト・エンペドクレ生まれ。舞台やテレビの脚本、演出家として活躍。イタリア放送協会 (RAI) でテレビドラマ版メグレ警部などを手掛ける。1978 年に『ことの次第 *Il corso delle cose*』で作家デビュー。『水の形 *La forma dell'acqua*』(1994 年) より始まるモンタルバーノ警部シリーズで人気を博す。

ムズやメグレ警部などと並ぶような国際的な探偵が登場してきたと言える。知識人の描く推理小説は、前者 2 つが大衆娯楽を前提としているのに対し、社会への提言を行うこと、すなわち“社会的責務 impegno”を前提としているところにある。イタリアではレオナルド・シャーシャによって始められたとみなされており、謎解き自体が目的ではなく、知識人の役割を強く意識している点が特徴といえる。1990 年代にアントニオ・タブッキ、ダーチャ・マライーニら純文学作家によって推理小説の手法を用いた社会問題への提言がなされている。さらには歴史家のカルロ・ギンズブルグが実際に起った事件への考察を試みている。1990 年代のこうした作品群が出現する以前、イタリア人による推理小説論が 1980 年代より盛んになっていることも、一連の作品群が生み出される前兆となっていたと考えられる。

第 3 章では“社会派推理小説”を書いたと言われる、松本清張とイタリア人作家レオナルド・シャーシャの相似性を指摘したい。日伊の 2 つの異なる国で同時期に共通性の多い作家が活躍した要因を論じていく。清張の『霧の会議』(1984～1986 年『読売新聞』連載)と類似性の高いシャーシャの『トード・モード』(1974 年) を取り上げて、作品に描かれる戦後イタリアの政治を見ていく。シャーシャは現実を預言した作家だと言われている。小説に書いたことが現実の事件となって起こったからである。1981 年に発覚したイタリアのフリーメーソン、ロッジ P2 の存在をすでに『トード・モード』で預言していた。『トード・モード』の着想を得たシャーシャ自身の体験と、その経験を書いた新聞掲載記事を取り上げていく。『トード・モード』で描いているのは、第二次世界大戦後のイタリア政治を担ってきたキリスト教民主党である。一党による長期政権も日本政治との共通点である。

また両作家は作品に宗教的蠱惑（こわく）の普遍性を取り上げており、同時に現実の世俗化した聖職者の姿を描き出す。昨今宗教離れが言われて久しいが、宗教という壮大なフィクションが多くの人々を動かしてきた歴史があり、宗教的蠱惑の普遍性は形を変えて存在している。松本清張の『霧の会議』(1984 年) には、松本清張の宗教への並々ならぬ関心も見え隠れする。物話は実際に起ったイタリア人銀行頭取ロベルト・カルヴィの怪死の謎に迫るもので、ヴァチカン銀行がマネーロンダリングに関与していたという国際スキャンダルに発展していく。ローマ教皇は「神の代理人」とも呼ばれ、キリスト教は何世紀ものあいだヨーロッパの歴史を支配してきた。

さらに両作家の近似性は、世界的な文学の流れや冷戦構造社会に基づいていると言える。文学的には、1940 年代から 1960 年代にかけて起こった文学の世界的ポストモダンの流れの中に両作家がいたという事実である。具体的には純文学の作家が、1920 年代～1930 年代にすでに黄金期を迎えていて、その当時使い古された推理小説の手法を使いだしたことを示す。探偵小説の持つ文学的可能性を両者は認識していた。社会の流れとしては、第二次世界大戦後に資本主義社会が歩んだ道のりを色濃く示している点である。日本もイタリアも経済発展と建設投機によって農村から都市への人口移動があり「根を持たない」ホワイトカラー層が多数生まれた。また意識的／無意識的にも冷戦構造のなかに置かれた社会であった。松本清張は「日本の黒い霧」(1960 年) や「ハノイでのこと」(1968 年) を書き、シャーシャは「スターリンの死」(1957 年)、「モロ事件」(1978 年) で防共組織とし

ての存在であったキリスト教民主党やカトリックの聖職者と共産主義[3]の関係について描いている。

[3] 1991 年 12 月ソビエト社会主義共和国連邦の終焉とともに、イタリアでは共産党系の政党や新聞が姿を消した。

第 1 章　イタリアにおける松本清張作品の受容

外国において、ひとつの作品が「流通する」ときに何が起こるのかーというのがこの節の主旨である。筆者は 2015 年 10 月～11 月にかけてイタリアにおける松本清張作品の現地調査を行った。現地調査の目的は、(1)イタリアにおける松本清張作品の受容調査、(2)他の翻訳作品等がないかを調べること、(3)松本清張と近似性の高いイタリア人作家レオナルド・シャーシャとの接点および相似性の要因を探ることにあった。

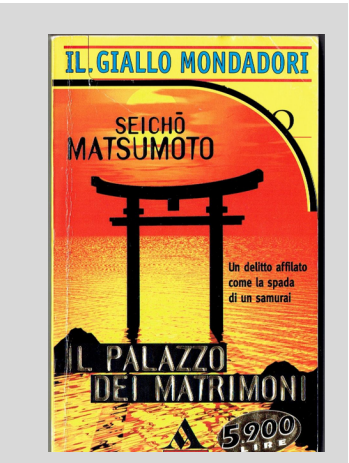
第 1 節　現地調査と結果

イタリアでの現地調査は、日本文化の研究拠点であるナポリ東洋大学、フィレンツェ大学、ヴェネチア大学、ローマ日本文化会館などを訪問し、長年従事してきた日伊の研究者らに聞き取りを行った。さらには松本清張作品のイタリア語訳を販売したジャッロ・モンダドーリ叢書の当時の編集長らへインタビューすることもできた。翻訳作品は以下の 3 作品に限られ、日本文学研究者の記憶にもないことから、これ以上の翻訳はないものとみられる。

『点と線』／イタリア語題：死は時刻どおり　*La morte è in orario*
マリオ・テーティ訳、イル・ジャッロ・モンダドーリ叢書 n.1149、1971 年／原作 1957 年

『砂の器』／イタリア語題：指から砂がこぼれ落ちるように　*Come sabbia tra le dita*
マリオ・モレッリ訳、イル・ジャッロ・モンダドーリ叢書 n.2112、1989 年／原作 1960 年

『黒い空』／イタリア語題：結婚式場　*Il palazzo dei matrimoni*、リディア・オリリア訳、イル・ジャッロ・モンダドーリ叢書 n.2570、1998 年／原作 1986 年



翻訳者に関してマリオ・テーティとリディア・オリリアは既に他界しており、マリオ・モレッリは日本文学研究者で知る者がいなかったことから消息不明で、残念ながら翻訳者へ

のインタビューは実現しなかった。マリオ・モレッリ訳の『砂の器』はフランス語からの重訳で日本文学研究筋の翻訳者ではないと思われる。

文学翻訳以外に、松本清張原作作品の映画がイタリアに流入していることが判明した。今回の調査で判明した作品は以下のとおりである。

野村芳太郎監督作品

『張込み』(1958) *Harikomi [Stakeout, La caccia]*　2008 年 DVD 販売 Raro video

『影の車』(1961) *Ruota di ombre*　1970 年ヴェネチア国際映画祭上映

『砂の器』(1974) *Castello Sabbia*　映画館にて上映

『鬼畜』(1978) *Kichiku [The demon]*　2008 年 DVD 販売 Raro video

『疑惑』(1982) *Il sospetto*　1986 年 3 月 5 日・12 日ローマ日本文化会館にて上映

鈴木清順監督作品

『影なき声』(1958) *La voce senz'ombra*　1996 年 11 月 8 日ローマ日本文化会館にて上映、鈴木清順監督作品特集

犬童一心監督作品

『ゼロの焦点』(2009) *Zero Focus*

2010 年ウーディネの極東映画祭 Il Far East Film festival に出品

なお野村芳太郎監督については、2005 年の他界時に以下の追悼記事が出ている。

さようなら野村監督

日本のスリラー映画監督、野村芳太郎氏が肺炎のため 85 歳で亡くなった。1974 年の『砂の器』は日本映画の傑作とみなされている。鬼才・野村監督は、黒澤明監督のアシスタントとしてスタートした。作品は『張込み』(写真掲載)『鬼畜』など 88 本にものぼる[4]。

『ラ・スタンパ』2005 年 4 月 10 日（日）

映画に関しては松本清張原作作品だという認識があまりないまま、流入している印象が強い。

---

[4] （原文）Addio a Nomura

È morto di polmonite a 85 anni il regista giapponese di thriller Yoshitaro Nomura. Nel 1974 diresse *Castello Sabbia*, considerate un capolavoro dei cinema nipponico. Figlio di un regista, Nomura aveva iniziato come assistente di Akiro(ママ) Kurosawa. Diresse oltre 88 film tra cui *La caccia* (nella foto) e *Il demone.*

Cultura e Spettacoli, La Stampa, p31, Domenica 10 aprile, 2005.

第 2 節　翻訳『点と線』への反応―時刻通りへの驚き―

松本清張作品初のイタリア語訳『点と線』（伊訳 1971 年／原作 1957 年）には不明な点が多い。イタリア語のタイトルは *La morte è in orario*「死は時刻通り」という意味だ。翻訳者マリオ・テーティ Mario Teti は 学術界でも定評のあった日本文学の翻訳者である。翻訳者が既にこの世を去っており断定はできないが、諸々の状況を考え合わせるとテーティの側から提案された翻訳ではなさそうだ。インタビューが実現した、当時のイル・ジャッロ・モンダドーリの編集長ジャン・フランコ・オルシ氏 Gian Franco Orsi は『点と線』が翻訳に至った経緯について、「おそらく先にフランスからの情報があったのだと思う。当時日本のことを知りようがなかった」と述べている。オルシ氏の情報によると、ジャッロ・モンダドーリは記録がなく当時の正確なデータを知るのは困難である、とのことであった。

『点と線』の監修者にマリオ・モレッリなる人物が名を連ねている。聞き込みの結果、少なくともイタリアにおける日本文学関係者ではなさそうである。『砂の器』をフランス語から重訳したのもマリオ・モレッリで、その際「日本のシムノン」と紹介文を書いている。また同じ名前のマリオ・モレッリがシムノンをフランス語からイタリア語に翻訳している。『点と線』について「フランスから先に情報があったのだと思う」いうオルシ氏の見解を踏まえると、次のことが言える。マリオ・モレッリは同一人物で、イタリアにおいてフランス文学翻訳に携わり、フランス経由で知った松本清張をイタリアに紹介するため『点と線』の翻訳者として白羽の矢を立てたのが日本文学の翻訳者マリオ・テーティだった、さらに『砂の器』では自ら翻訳に乗り出し、日本語は専門ではないためフランス語から翻訳したとも推測される。

なおジャン・フランコ・オルシ氏へのインタビューは、2015 年 11 月 28 日（土）にミラノで行われた。なおオルシ氏とのインタビューは、ウラニア・モンダドーリのジュゼッペ・リッピ氏の仲介によるものでインタビューにも同席した。ウラニア・モンダドーリは、モンダドーリ出版の SF 部門である。オルシ氏はすでに引退しており、リッピ氏とはかつての同僚であった。

ここで『点と線』のイタリア語のタイトル『死は時刻通り *La morte è in orario*』について考えたい。英語版（1970 年）のタイトルが *Points and Lines* であり、それに該当するイタリア語で十分であるはずなのに、わざわざ変えているところに、翻訳者や編集者の意識を窺い知ることができる。『点と線』は毎日列車が同じホームに入らなければ成立せず、しかもたった 4 分間を利用したトリックである。イタリアではどのホームに列車が入ってくるのか直前にならないと分からず変更も多い。発着掲示板には最初から「遅延 ritardo」の欄があり、事故等がなくても遅れは慢性的である。

イタリアの鉄道システムは日本とは大きく異なり、時刻通りに走らずストライキも多い。当駅出発の列車でさえも時間どおりに出発しないことがあり、じっと待っていると列車を乗り換えるように放送が入ることもある。ホーム番号が電光掲示板に出ていても、変更される可能性があるため直前まで油断ならない。駅の時刻表は「出発 Partenze」と「到着 Arrivi」の 2 種類が掲示されている。電光掲示板には、行先 Destinazione、時刻 Orario 、遅延 Ritardo、ホーム Binario が表示されている。改札がなくホームに備え付けてある刻印機で切符に打刻する。検査員が時折車内に乗り込んできて切符を調べられることがあり、その際に適切な刻印がなければ、罰金を払わなければならない。しかし刻印機が故障していることが度々ある。日本では車内で切符を買えるが、イタリアでは切符を持っていなければ不正乗車とみなされる。

イタリア国鉄 Ferrovie dello stato Italia (FS) は、ストライキ、運休、遅延、故障が多くイタリアを鉄道で旅をしたことがある者ならば、遭遇した経験も多いのではないかと思う。1990 年の民営化以降サービスの改善とともに運行状況も年々改善されてきている。民営化によって持ち株会社となり、各部門が独立、分社された。現在鉄道の運行管理、切符販売などを担当するのがトレニイタリア社、国内主要駅を管理するのがグランディ・スタツィオーネ社、イタリア高速鉄道を運営するトレーノ・アルタ・ヴェロチタ（TAV）社などに分かれている（イタリア文化事典 2011: 518）。

『点と線』に話を戻すと、イル・ジャッロ・モンダドーリ（ミステリー部門）編集長オルシ氏も、ウラニア・モンダドーリ（SF 部門）編集長リッピ氏も声を揃えて強調したのが「随分と“時間通り puntuali”で、列車が時刻通りに走らないと成立しない推理小説だと当時思った」という点であった。2 人へのインタビューから、イタリア語翻訳タイトル「死は時刻通り」にも現れている「時刻通り」という概念が、トリック云々というよりもイタリア人に強烈な印象を残したのではないかと考えられる。

外国の鉄道事情に関して権田萬治が次のように書いており、イタリアにも当てはまるといえる。

> 実は、鉄道列車や飛行機などの時刻表を使うクロフツ的なアリバイ崩しは、アメリカなどではまったく人気がない。それは広大な国土のアメリカでは、鉄道があるにしても、自動車や飛行機が主要な交通機関であり、それらは時間の変更の可能性が大きいから、万全の犯行計画が立て難いというわけなのだ。
>
> イギリスでも鉄道技師だったクロフツ以外には、余りこの手のアリバイ崩しは、好まれていないようである。

イタリアの鉄道における電光掲示板
遅延 Ritardo の欄が最初から設けられている
（原口 1999: 131）

それというのも、鉄道列車ダイヤに対する信頼度が日本に比べずっと低いからである。

（…）

これに対して、日本は時刻表を使ったアリバイ崩しが好きなようである。その理由は、国が狭く、全土に網の目のように鉄道網が張り巡らされていて身近なこと、分刻みの列車ダイヤが正確で国民に信頼されていること、旅好きの国民性などが挙げられる。

（権田 2009: 78）

イタリアの鉄道事情については、鉄道・旅ライターの原口隆行[5]が『イタリア＝鉄道旅物語』（1999 年）に詳しく書いている。原口は何度かイタリアを訪れており、『イタリア＝鉄道旅物語』では国鉄時代と民営化後の様子を観察している。 原口によると、国鉄民営化の先鞭をつけたのが日本であり、これにならってイギリス、ドイツ、オーストリア、イタリアなどの国鉄が民営化されている（原口 1999: 18）。 この著書で注目するのは次の箇所である。

定時運行は守られるようになったか

イタリアの鉄道、とくれば、もうひとつ忘れてはならないことがある。

列車がよく遅延する、それに対する対応がなっていないといった悪評が高いことである。

実際、昔はひどかった。なにか、時間通りに運行すると逆に沽券にかかわるとでも思っているのか、とにかくダイヤどおりに列車が発車することは少なかった。

たまたまスイスのブリークでの体験談になるが、かつてここからジュネーヴに向かったことがある。たまたまミラノ発の国際列車だったのだが、案の定 12 分遅れでやってきた。この間、ホームの先端でスイス連邦鉄道の機関士が待機しており、そのすぐそばで見ていたが、この機関士は悠然としたものである。そしてこの程度の遅れは織り込み済みだといわんばかりに、途中の駅に停車するごとに少しずつ遅れを取り戻し、ジュネーヴのコルナバン駅に到着したときにはきっちり定刻だった。（原口 1999: 23-24）

このような原口の体験談ひとつとっても、イタリアの鉄道事情さらには国境を隔てたイタリアとスイスのお国柄の違いが表れている。一般的にスイスの公共交通機関は定刻通りに運行され正確である。 原口の体験によると、スイス側の機関士はイタリアでの遅れを承知しており、この遅れを考慮したうえで時間通りになるように運転しているというわけだ。

鉄道のみならずイタリア人の時間感覚は日本とは大きく異なる。イタリアでは待たされることが多く、特に公共サービスにおいては待ち時間が長くなる。その傾向はイタリア北部よりも南部のほうが強い。林直美はイタリア人の時間感覚ついて次のように記している。

[5]原口は雑誌「旅」や「旅と鉄道」で多数執筆しており、「旅」では 1957 年に松本清張の「点と線」が連載されている。

イタリア人の現在と未来に関する思考パターンは，この「未来は予測不可能である」という前提のもとに，「だからあらゆる可能性を考えてしっかり明日に備えよう」というよりはむしろ，「だからあまり考えても無駄で，とりあえず今ある時をしっかり楽しもう」という方向に傾くものであり，あまり後先考えず現在という時間の中にリラックスして浸っている感がある.(…)「遅れる」「待たせる」ことは，本質的なところでは倫理問題として捉えられていない．待たせる側の時間の使い方は，非効率的というよりむしろ，能率的にしようという意志の不在が感じられない．(…) 列車の発着掲示板には「遅れ」の欄が最初から用意されている．公共施設や役所，郵便局などでは長蛇の列が頻繁に見られるが，利用者のために迅速に状況改善をはかろうとする姿勢は薄い．（イタリア文化事典 2011: 148-149）

『点と線』のからくりが成り立つ前提として定時運行の文化がある。日本では電車が時間通りに動く、ということ自体がそもそもイタリア人の興味を引いたようである。イタリアの読者や鉄道システムの感覚では、『点と線』のからくりが破綻してしまう。日本ではそうではなくて、電車は時間通りで、本来予測できないはずの「死さえも時刻通り」に訪れる。この「時刻通り」への衝撃が、イタリア語のタイトル「死は時刻どおり」になったと考えられる。 テクストに接した時に感じた「時間感覚」に関する本質的違和感がよく現れていると言えよう。イタリアから日本を見た時の、エキゾチズムとは異なる要素で、文化的違和感をあぶり出させたのは、清張作品が海外で起こした一つの反応だったと考えられる。第二次世界大戦後日伊の交流が急激に盛んになり始めるとともに、清張作品を介して、日本の鉄道システムをはじめとする日本の国民性や戦後社会の文化が興味深く捉えられ始めていたようである。

第 3 節　切れ長の目のメグレ―日本文学翻訳事情―

日本の鉄道の定時運行システムがイタリア人に驚かれた一方で、外国文学に求められた異国情緒についても当時の書評について取り上げたい。 『点と線／（伊）死は時刻通り』は 1971 年 2 月 7 日にイル・ジャッロ・モンダドーリ叢書の 1149 番目の作品として発売された。イル・ジャッロ・モンダドーリ叢書は 1929 年より海外ミステリーをイタリア人読者に翻訳・紹介しており、書店ではなく、街角にある新聞雑誌販売店で毎週販売される。『点と線』は発売から 2 週間後に、イタリアで最も重要視されている全国紙『コッリエーレ・デッラ・セーラ Corriere dela sera』の文化欄に書評が掲載された。書評は以下のとおりであり、同時に書かれた結城昌治の『長い長い眠り』についての書評にも注目したい。

VEDO GIALLO

VEDO NERO

Un cugino di 007

Due polizieschi ambientati in Giappone

Costellato di esplosioni come un prato primaverile di margherite questo «Terrore in Europa», di Richard Raine (Garzanti, pp. 226, L. 1000). Salta in aria di tutto: ville svizzere con dentro celebri tecnici aeronautici, jet, gondole veneziane e torri-bunker da far invidia al «nido delle aquile» hitleriano. Impassibile fra tante deflagrazioni, l'investigatore britannico David Martini — che è poi il solito cuginetto di James Bond — passa da Zurigo a Milano, dal Canal Grande al Brennero, e scopre il dinamitardo. Raine sa mescolare abilmente fantapolitica e spionaggio; il ritmo è sostenuto, di classe lo stile.

*** Dopo l'transistor e le motociclette, arrivano i romanzi polizieschi giapponesi. Il primo è «La morte è in orario», di Seicho Matsumoto (Mondadori, pp. 145, L. 300). In una spiaggia dell'isola di Kyushu vengono trovati i corpi di Kenichi Sayama, funzionario del ministero dell'industria e commercio e della bellissima Otoki, «geisha» del ristorante Koruki di Tokio. Si pensa subito a un duplice suicidio per amore, ma un Maigret dagli occhi a mandorla riesce a dimostrare che i due sono stati uccisi in località diverse, e smaschera l'inventore della criminosa messinscena. Articolato secondo gli schemi del «thrilling» deduttivo (si pensi al ruolo determinante delle coincidenze ferroviarie...) il libro ha un «taglio» molto occidentale e poco concede agli amanti del folclore nipponico.

*** Più esotico, nonostante il titolo chandieriano, è il secondo giallo-giallo del mese, «Un lungo lungo sonno», di Shoji Yuki (Longanesi, pp. 255, L. 350). Kenzo Nohira, industriale del giocattolo, tre volte divorziato, accanito donnaiolo e discreto poeta, è scoperto cadavere nel parco del tempio di Meiji. Gli indiziati sono tanti perché Nohira, col suo giro di ex-mogli, ragazze abbandonate e aspiranti vere-seggiatori che potrebbero invidiargli la sua fama letteraria, conta troppe inimicizie. La più sospettata finisce per essere Kocho, l'ultima amante, che... Certo, anche qui fa spesso capolino Agatha Christie, ma nel complesso l'atmosfera ricorda maggiormente Tanizaki, Kawabata & C.

*** «Un 'adagio' silenzioso», di Ben Gasy (I neri del momento, pp. 164, L. 300), che ha per protagonista Benjamin «Jerry» Parker, un sordomuto, rammenta nella sua struttura — e non sembri un paradosso — un vero e proprio «fumetto d'azione». L'Eroe non parla o si esprime a monosillabi gutturali. I suoi antagonisti sono parchi di parole, come tutti i «cattivi» che si rispettano, e ogni commento o descrizione si trasforma, così, in una sorta di didascalia. La trama è banaluccia (Benjamin assicura alla CIA una vamp, che è a capo della «rete» sovietica) ma ha il pregio di poter essere seguita e compresa (cosa che non sempre accade con le storie di spie...) sul tram o sulla metropolitana.

*** Segnalazioni: da Longanesi: R. Deming: «Squadra speciale» (L. 250); da Mondadori: D. E. Westlake: «Gli inefabili cinque» (L. 3000).

Alfredo Barberis

Su *Belfagor* (a. XXVI, n. 1), fra l'altro, uno studio di Enrico Tiburzio sul primo dopoguerra di Thomas Mann e un ritratto di Carlo Levi scritto da Giovanni Falaschi.

イタリアの全国紙に掲載された『点と線』の書評（1971 年）

「007 のいとこ　日本が舞台の 2 つの推理小説」

***まず松本清張の『点と線』（モンダドーリ出版, pp.145, 300 リラ）。九州での浜辺で、通商産業省の職員である佐山憲一と、東京の料亭「小雪」の美人「芸者」お時の死体が見つかった。すぐに情死が疑われたが、切れ長の目のメグレは、二人が別々の場所で殺害されたことを証明し、犯罪を偽装した人物を突き止めることができた。推理的「スリリング」な構図によって、結合されている（鉄道の接続便の限定的役割を考慮する）。この本は非常に西欧的“切り口”であり、日本文化ファンからはあまり支持を受けられなかった。

***よりエキゾチックなのは、月刊ジャッロ・ジャッロによると、チャンドラー風のタイトルであるが、結城昌治の『長い長い眠り』だ（ロンガネージ出版,pp.255,350 リラ）。野平研造は玩具企業家で、3 回離婚歴があり、相当な女好きであり、そこそこの詩人である。 彼が明治神宮外苑で死体となって発見された。登場人物はたくさんおり、野平の元妻たちのグループ、捨てられた娘たち、彼の文学的名声を妬んでいたかもしれない詩人志望者など多くの敵対者がいる。最も疑うべきは、最後の愛人胡蝶である。確かに、この作品にもアガサ・クリスティの傾向があるが、全体に谷崎や川端をより思い出させる趣がある。

アルフレード・バルベリス

全国紙『コッリエーレ・デッラ・セーラ』

1971 年 2 月 21 日（日）p.13／pp.28. [6]

---

[6] (原文) VEDO GIALLO VEDO NERO

Un cugino di 007　Due polizieschi ambientati in Giappone

*** Dopo l'transistor e le motociclette, arrivano i romanzi polizieschi giapponesi. Il primo è « La morte è in orario », di Seicho Matsumoto (Mondadori, pp.145, L. 300). In una spiaggia dell' isola di Kyushu vengono trovati i corpi di Kenichi Sayama, funzionario dei ministero dell'industria e commercio e della bellissima Otoki, « geisha » del ristorante Koruki di Tokio. Si presensa subito a un duplice suicidio per amore, ma un Margret dagli occhi a mandorla riesce a dimostrare che due sono stati uccisi in località deverse, e smaschera l'inventore della criminosa messinscena. Articolato secondo gli schemi del « thrilling » deduttivo (si pensi al ruolo determinante delle coincidenze ferroviarie...) Il libro ha un « taglio » molto occidentale e poco concede agli amanti del folclore nipponico.

***Più esotico, nonostante il titolo chandieriano, è il secondo giallo-giallo del mese, « Un lungo lungo sonno », di Shoji Yuki (Longanesi, pp.255, L. 350). Kenzo Nohira, industriale del giocattolo tre volte divorziato, accanito donnaiolo e discreto poeta, è scoperto cadavere nel parco del tempio di Meiji. Gli indiziati sono tanti perché Nohira, col suo giro di ex-mogli, ragazze abbandonate e

1971 年発売当初は“西欧的”であると受け止められ、エキゾチシズムを求めている様子がわかる。しかしこの書評で注目したいのが「切れ長の目のメグレ un Margret dagli occhi a mandorla」という表現である。mandorla はアーモンドのことで、日本人や中国人の持つ目の形についてイタリア人が使う表現である。数あるヨーロッパの探偵の中でも、ジョルジョ・シムノンのメグレを挙げている点に、清張作品をどう見ていたのが表れている。『点と線』の探偵が刑事であった点から「警察小説」と捉え、小説の雰囲気からメグレを連想したのであろう。シムノンはイタリアで人気が高く、1930 年代から数多くイタリア語翻訳されてきた。こうした背景を踏まえると辛口の書評であるとともに、「切れ長の目のメグレ」という表現は一種の賛辞とも受け取れるのである。シムノンのイタリアでの人気を示す一例として、イタリア人作家レオナルド・シャーシャが 1954 年文芸誌『文学 Letteratura』7・8 月号に「メグレの経歴 La carriere di Maigret」と題した記事を寄せている。フランスはシムノンの小説に国産の探偵小説を見出したこと、アンドレ・ジッドがシムノンの才能に気づいたことが幸運だったことについて書いている。

ここでひとつの疑問が浮かび上がる。フランスで松本清張は「日本のシムノン」と紹介されて人気は高いが、1971 年時点ではどうであったのだろうか。「松本清張海外翻訳作品一覧」(柳原暁子 2015: 249-255) によると、フランス語翻訳がなされたのは 1982 年の『点と線』が初めてである。「日本のシムノン」という呼称や、シムノンと松本清張を結び付ける傾向はいつからあるのか。フランス以前の翻訳『点と線』の出版国は、1962 年ドイツ、1964 年チェコ、1969 年ドイツ、ブルガリア、1970 年日本（英語訳)、1971 年イタリア、1972 年エストニア、1973 年フィンランド、アルメニア、1979 年イギリスである。1971 年のイタリア語翻訳『点と線』の書評でシムノンのメグレ警部と松本清張の刑事を結びつける傾向があるので、イタリアもしくはそれ以前の翻訳出版国に、すでにこうした見方が形成されていた可能性がある。

同時に書評が挙げられている結城昌治の『長い長い眠り *Un lungo lungo sonno*』は、1970 年 12 月にロンガネージ出版の月刊「発禁ミステリー *I gialli proibiti*」シリーズの 1 冊として販売された。翻訳者はリディア・オリリア Lidia Origlia で、後に松本清張の『黒い空』のイタリア語翻訳に携わった人物である。「発禁ミステリー」シリーズは 1952 年 11 月から 1974 年 2 月まで販売された翻訳ミステリーのペーパーバックである。現時点で確認できる限りでは、第 1 シリーズ 176 作品（93 号・94 号は合併号）と、第 2 シリーズ 33 作品の全 209 作品である。『長い長い眠り』は第 2 シリーズの 31 番目の作品である。この「発禁ミステリー」シリーズの特徴として、表紙に美しい女性の姿が描かれている。

これはイタリア映画において「ジャッロ」と呼ばれて独自のジャンルとして、1960 年代から発展していった恐怖映画の「女性は欲望の対象であるとともに、最高の主役であり犠

---

aspiranti verseggiatori che potrebbero invidiargli la sua fama letteraria, conta troppe inimicizie. La più sospetta, finisce per essere Kocho, l'ultima amante, che... Certo, anche qui fa spesso capolino AgathaChristie, ma nel complesso l'atmosfera ricorda maggiormente Tanizaki, Kawabata & C.

Alfredo Barberis

Corriere letteraio, Corriere della sera, p13, Domenica 21 febbraio 1971

牲者にもなるのだ」（ブルネッタ 邦訳 2008: 296）という視点ともつながる。ジャッロ映画は、残虐性や性愛と死を特徴としており、薄気味悪い城を舞台に古典的な雰囲気を維持しようとする流派や、現代社会の精神病理学に結び付けて不健全で病的な雰囲気を醸し出そうとする流派がいて、文学での推理小説を意味する「ジャッロ」とは大きく異なる。

日本人から見ればどこかユーモラスな結城昌治の作品が、なぜイタリア人にはエキゾチックで谷崎潤一郎や川端康成の作風に通じているように見えたのか。ロンガネージ出版の「発禁ミステリー」シリーズが外国ミステリーの翻訳であり異国情緒を感じさせる媒体であり、さらに表紙絵の持つ性愛を売り出した印象、作者や小説舞台が日本人または日本であることに、既に翻訳されていた谷崎や川端の持つ東洋的女性美を連想させたのかもしれない。谷崎は 1929 年に『愛すればこそ』、川端は 1959 年に『雪国』を皮切りに、イタリア語に翻訳されている。

イタリアにおける日本文学研究は 19 世紀末に遡り、その拠点となってきたのがナポリ東洋大学（オリエンターレ L'Orientale）とヴェネチア大学（カ・フォスカリ Ca' Foscari）であった。公益財団法人日伊協会監修『イタリア文化事典』（丸善出版、2011 年）によると、長いあいだ日本文化は一部の研究家の研究対象でしかなく、日本文化への関心が高まったのは 1980 代になってからであり、その要因が経済発展と日本製品の普及にあり、一般のイタリア人が日本に興味を持ちだしたことによるとしている。一方アドリアーナ・ボスカロは「日本への関心は 1960 年代に急激な高まりを見せ、その後、70 年代の下降を経て 80 年に再び高まり、90 年代を通じてその熱が保たれていたことがわかる」(Boscaro 2000: ii [165])との見解を示している。松本清張作品の翻訳は、こうした海外における日本文学翻訳事情と無関係ではない。『イタリア文化事典』とボスカロの著書の違いは 1960 年代に関する点であるが、実際に 1960 年代は急激に日本文学の翻訳が増えている。アドリアーナ・ボスカロ編纂の日本文学翻訳文献目録『イタリア語になった日本文学 100 年のあゆみ Narrattiva giapponese. Cent'anni di traduzione』(カ・フォスカリーナ出版、2000 年）ではボスカロが拾い上げた年代ごとの翻訳作品数を知ることができる（作品数の計上は執筆者自身による）。ボスカロ自身も書いているがリストから洩れているものがあるかも知れないとのことだ。

1910 年代 2
1920 年代 4
1930 年代 4
1940 年代 11
1950 年代 5
1960 年代 27
1970 年代 12
1980 年代 62
1990 年代 96
2000 年代 ―

1960 年代の日本文学への急激な興味の高まりは、一部の限定された人々のあいだに発生

したものと考えられる。そして 1970 年代の一旦落ち着きを経て、再び 1980 年代により規模を拡大させて一般にも広がるのである。

『イタリア語になった日本文学 100 年のあゆみ』(2000 年)と、当時の記事、図書情報を突き合わせると 1970 年 12 月の結城昌治の『長い長い眠り』と、1971 年 2 月の松本清張の『点と線』が、イタリアに入った最初の日本の推理小説と考えられる。以下、年代順にイタリアで紹介された日本のミステリーである。

イタリア語翻訳出版年／作者／原題／イタリア語タイトル

1970 年 結城昌治 『長い長い眠り Un lungo lungo sonno』
1971 年 松本清張 『点と線 La morte è in orario』*GM
1976 年 江戸川乱歩 『人間椅子 La sedia di carne』
1986 年 横溝正史 『犬神家の一族 L'ascia, il koto e il crisantemo』*GM
1987 年 戸川昌子 『猟人日記 Di amore si muore』*GM
1988 年 夏樹静子 『第三の女 Tempesta d'autunno』*GM
1989 年 松本清張 『砂の器 Come sabbia tra le dita』*GM
1992 年 江戸川乱歩 『陰獣 La belva nell'ombra』
1993 年 戸川昌子 『火の接吻 Un baccio di fuoco』*GM
1994 年 江戸川乱歩 『盲獣 Il mostro cieco』
1997 年 夏樹静子 『天使が消えていく L'abbandono』*GM
1998 年 松本清張 『黒い空 Il palazzo dei matrimoni』*GM
1998 年 西村京太郎 『ミステリー列車が消えた Il treno del mistero』*GM
2000 年 東野圭吾 『白馬山荘殺人事件 Filastrocca per l'assasino』*GM
2003 年 桐野夏生 『OUT アウト Le quattro casalinghe di Tokyo』
2004 年 桐野夏生 『柔らかな頬 Morbide guance』
2008 年 桐野夏生 『グロテスク Grotesque』
2015 年 桐野夏生 『顔に降りかかる雨 Pioggia sul viso』

*GM はイル・ジャッロ・モンダドーリ叢書から出たものである。

一定の間隔で日本のミステリーが翻訳されており、1990 年代までイル・ジャッロ・モンダドーリ叢書での翻訳が多かった。またイタリアにおける日本文学の翻訳が高まると、日本ミステリーの数も増えている。近年桐野夏生の翻訳が多いのは、トリノ大学助教授ジャンルカ・コチによるものが多い。これらの翻訳群は日本のミステリーが少なからず評価されていることの表れでもある。そして幸運に翻訳者と出会えるかによるところが大きい。

この節を終える前に、イヴ・シュヴレル『比較文学入門』Yves Chevrel、*La littérature comoarée* 1989 の第 2 章「外国作品の受容」について触れておきたい。イタリアにおける清張作品の流通と受容を追うに当たって、しばしば考えざるを得えなかった問題を含んでいるからだ。

一つの外国作品の出現は偶然の出来事である。特定の国への導入がひとたび決まっ

ても、作品はなお、その国の作品であればそれほどさらされないような、こまごまとした困難に遭遇する。見つけなくてはならないのは翻訳者であり、刊行の基盤（出版社、雑誌）であり、広めてくれる書店である。評価確立の契機―文学賞、そのような文学の流行をかき立てる大きな展覧会、学校・大学のプログラム、公共図書館の注文、翻案（時代によって、演劇へ、映画へ、テレビへ―さらに派生商品もありうる）―は、さらに見出すのが困難で、しかも不確実である。

外国作品は脆弱な作品で、支えを必要としている、それを提供してくれるのは、その作品について書かれた批評の言説である。

批評の言説は、外国作品を導入した連鎖の終わり近くに介入してくる。根本的な仮説は、またしても、誰も外国文学については、自国文学について語るように語らないということで、その結果は重大である。

イヴ・シュヴレル『比較文学入門』小林茂訳，白水社, 2009, pp37-38.

イタリア人の感性にも合い、また翻訳者に出会うという幸運にも恵まれるということが望まれる。ジャッロ・モンダドーリは確かに老舗のミステリー叢書ではあるが、書店ではなく新聞雑誌販売店に置かれたことや同じ翻訳者によるイタリア語訳がないことが惜しまれる点であり、この点において今後の可能性を示しているのである。

第 4 節　ジャーリズム界が見た松本清張

松本清張の名前はイタリアの全国紙に幾度か掲載されており、翻訳業界とはまた違った様相を見せる。松本清張にいつも現代日本の“解説”を求めていた。ここでは新聞記事を取り上げて、イタリアのジャーナリズム界が松本清張をどのように見ていたのかを考察する。

（1）ベトナム戦争関連記事

松本清張の名前がイタリア全国紙に載ったと確認されている記事の中で最も古いものでは 1968 年のベトナム戦況を伝えるニュースであった。

（…）和平交渉予備対談のためのアメリカ - 北ベトナムの会談準備は、北ベトナム代表のハノイ政府からの声明で昨日進展した。このニュースは東京から届いたもので、日本人ジャーナリスト松本清張氏が北ベトナムのファン・ヴァン・ドン首相から許可されたインタビューを金曜日に公表しており、ハノイ政府にはアメリカと協議する準備が出来ているとする報道があった。この対談のために北ベトナムに派遣された上級職員たちの名は知られていない。北ベトナムのファン・ヴァン・ドン首相について、松本氏は次のように表明している。「アメリカがハノイとの直接接触提案を受け入れないのなら、アメリカは北ベトナムから悠々と身を引くことがで

きないのかもしれない。もしワシントンがこうした接触を避けるのであれば、アメリカを北ベトナムから遠ざけるための方法をたくさん知っている」。明らかに、ハノイは警戒心を持って仮条約会談をする用意がある。(…)

「スタンパ・セーラ」1968 年 4 月 8（月）- 9 日（火）

アメリカ-北ベトナム休戦の前提条件ーハノイ代表は交渉準備が出来ている[7]

*下線は執筆者による。

この記事の注目すべき点は 2 つある。まず東京からもたらされたニュースであること、そして松本清張が作家ではなくジャーナリストと認識された点である。「このニュースは東京から届いたもの」として、北ベトナムのファン・ヴァン・ドン首相への単独会見が非常に貴重なニュースとしてイタリアに配信されたことを示している。

単独会見への道のりは『ハノイで見たこと[8]』に刻銘に記されており、イタリアでの報道までの過程は以下のとおりである（日付はハノイ時間による）。

4 月 1 日（月）ジョンソン声明（ワシントン時間：3 月 31 日午後 9 時）
4 月 3 日（水）午後 9 時半北ベトナム政府による回答声明
4 月 4 日（木）午後 2 時半過ぎより 1 時間半ほどの単独会見
4 月 5 日（金）インタビュー公表
4 月 8 日（月）付けのイタリア全国紙に掲載

単独会見から東京を経由して瞬く間にイタリアで報道されており、世界各国でもイタリア

---

7 （原文）(…) I preparativi dell'incontro fra americani e nord-vietnamiti per i colloqui preliminari dei negoziati di pace hanno fatto ieri un passo avanti, con l'annuncio della designazione, da parte del governo di Hanoi, dei delegati nord-vietnamiti a tale incontro. Questa notizia giunge da Tokio, dove il giornalista giapponese Seicho Matsumolo ha pubblicato una intervista concessogli dal primo ministro del Nord Vietnam Pham Van Dong, venerdì scorso, poche ore dopo l'annuncio che il governo di Hanoi è disposto a trattare con gli Stati Uniti. I nomi dei funzionari nord-vietnamiti delegati a questo incontro non sono noti. Matsumoto ha riferito la seguente espressione del premier nordvietnamita: « Gli Stati Uniti non potrebbero onorevolmente ritirarsi dal Vietnam se sabotassero i proposti contatti diretti con Hanoi. Il Vietnam del Nord conosce un certo numero di mezzi per allontanare gli Stati Uniti dal Vietnam se Washington sabotasse tali contatti ». Evidentemente, Hanoi si appresta all'incontro preliminare con diffidenza.（…）

Stampa Sera, lunedì 8 -martedì 9 aprile 1968.

I preliminari di armistizio fra Stati Uniti e Nord Vietnam

E' pronta la delegazione di Hanoi per le trattative

8 「ハノイからの報告（原題=松本清張の北ベトナム報告）」(『週刊朝日』昭和 43 年 4 月 5 日～6 月 7 日掲載)、と「ハノイ日記」(『赤旗』日曜版、昭和 43 年 4 月 21 日～6 月 2 日）で構成される。

と同様に報道された可能性がある。単独会見が、外国メディアにとっても大きな衝撃と貴重な情報源となっている様子がわかる。

（２）特集「黒い霧の国」

LA STAMPA
Archivio Storico dal 1867
http://www.archiviolastampa.it/

LA STAMPA

MIRKO PERDUTO E RITROVATO
Anche la malavita ha il suo benessere

COMINCIA "L'ERA SELVAGGIA„ IN GIAPPONE
Il paese delle nebbie nere

IL MERCATO D'ARTE IN ITALIA
Le gallerie volanti

30' MIGLIAIO
Carlo Lauterzi
Le voci della notte

全国紙に取り上げられた
特集「黒い霧の国」（1973 年）

次に取り上げるのが 1973 年の特集「日本で“非合法の時代”が始まる 黒い霧の国」（「ラ・スタンパ」ｐ3,1973 年 6 月 8 日金曜）であり、日本への関心の高まりを示す一例となっている。東京にいる特派員が松本清張にインタビューをして書いた記事である。イタリア人が見た日本はいかなるものであったのか。紙面のほぼ 1 ページを占める記事は、清張へのインタビューを交えながら戦後の日本を紹介するといった構成である。長文ではあるが引用したい。

日本で“非合法の時代”が始まる
黒い霧の国

これは、日本人作家の松本清張（所得 4 億）によって創られた表現で、彼はアメリカの占領と、“昔の価値”の崩壊をほのめかしている。アメリカの占領が新中流階級や懐古主義者から支持されているのは、彼らは根がなく苦しみや死の対価として熱狂されているのだ。彼の本に戻ると、国家主義や西欧との競争が詳細に書かれている。

（特派員より）東京　6 月

今年は、祖先と同じ職業に就きながら同じ土地に住んでいる者は見受けられなかった。別の記録を付け加えると「我々は世界で最もさすらう民族だ」とある。社会的流動性や別階級への移動はアメリカ合衆国を超え、その半数以上の日本人が 30 歳以下である。若者の 28 パーセントは大学卒か大学生である。一方経済は“純化”し、サービス業や会社、高度専門職は多数の「ホワイトカラー」を生み出す。新たな中産階級は根を持たない。大学では、雇用者や政府に対して一致した見方を示している。「恐れの全てを集めて拡散している」と。彼らは知っている。ソフィア大学のピタウ教授が言うように「彼らは危機の前に恐怖で死んでいる」のだ。

そして日本の歴史が始まって以来初めて、学校や病院や公共の緑といった「国民の福祉」のために、国家予算は莫大な出費を想定している。もしくは政府は、年金や医療補助への法律を提案している。しかしかつての「同意」の風潮に戻るわけではなく、問題はより深刻で、目下批判合戦になっている。そして再び、大企業家や「仕事の師匠たち」といった、より物事を知っていて計算している者たちは「魂の回復」を試みている。

放浪者のようになると、都市から都市へ、行政区から行政区へと日本を巡り、自ら

話して語り、忠告し非難する。「孤立させられた放浪」と呼ぶ。過去の野心を大切にしまい、「仕事に従うことは日本人にとって良いことだ」といつも同じモットーを繰り返す人々の国内の行脚なのだ。

(…)

作家の妻はお茶を出し、緑の着物でゆっくりお辞儀をしながらひざまずいた。夫が合図すると立ち上がって再びお辞儀をしながら姿を消した。「これが古き日本ですか？」「これが日本です」。住宅地にある邸宅の外で、暴力とサディズム映画の宣伝がしてあった。女を拷問にかける男、鞭を請う女、血だらけになりはだけた胸。日本映画に残っている残虐性は少なくなく、毎晩テレビで放送している。「しかし私は必要なときだけしか性について語りません。暴力はいつも不可避な魂の発露なのです」と松本氏は言う。

彼の人気にはわけがある。人間が犯罪を成し遂げる状態になるように、一人の人間に生じるのだ。そして暴力に取りつかれている状態の日本のミステリーが、歴史家やテレビによって普及する。「不可避で、長く抑制された爆発の所産なのです」

（…）

彼は「黒い霧」という表現を創った。アメリカの占領について書いた本の題名である。古い価値観が崩壊し、破壊は「背中の痛みの断絶であった」とする。その危機、その集団の混乱、その計りしれない不安が覆ったのは、計り知れない悲劇ではなく「黒い霧」であった。その意味するところは異常や不祥事である。

なぜ三島なのか？

「“ホワイトカラー”や若者、日本のなかにあったものは何でしょうか？3 人の偉大な作家がいて、そのうちの一人はノーベル賞を受賞し、(2 人は）自殺しました。三島の自殺はいまだ人々を魅了し続けています。人々は認めていないけれども理解はしています。三島は先へいく勇気を持ったのだと彼らは気づいていました。彼らは三島の何を愛しているのでしょう？」「西欧の影響下にあった彼のスタイルとともに貴族的思想です。三島は美を探し、その美にはいつも破壊と死、宿命がありました。彼は特別な男です。特別な男はいつまでもそのままでいることができません。彼の周期が完成したとき、美のショーに人生を賭けて自死したのです」。

松本氏は、他のことを話して、すぐに三島に戻り、中断があって、再び自ら話し出して三島の話に戻るのだ。少年時代、学問、美の崇拝、狂気、性的異常、家、両親。これは人々が真似したもので、中傷したものだ。「別の話にしましょう」と言っては繰り返し、そしてまた三島について話す。

「三島はあなたにとって、とても重要ですか？」「分かりません、しかし宿命なのだと思います」。

「三島の何が一番好きですか？」「私は三島が好みではありませんし、全く好きではありません。彼の美への崇拝や理想主義に魅了されましたが、しかし高尚さは間違っていたと思います。美は死だとする確信や、偉大で美しいものは苦しみであるとする確信は間違っていたと思います。日本人は彼らの繁栄が空虚であることを知っていま

す。観念的な真の美や苦しみはないものだからです。こうして彼らは危機の中にいて、100 万人の私の読者は恐れを持っているのです」。

ミケーレ・ティート
「ラ・スタンパ」，ｐ３, 1973 年 6 月 8 日金曜

日本において「黒い霧」という言葉が流行ったのは 1960 年であり、第二次世界大戦後アメリカ軍の占領と戦前の価値観の崩壊があった。イタリアでは文学の翻訳数が示すように 1960 年代からの日本への関心の高まりとともに紹介されたと考えられる。「新たな中産階級は根を持たない」「孤立させられた放浪」と第二次世界大戦後のホワイトカラーの悲哀を書いた松本清張の言葉が使われたのは、イタリア社会でも似た状況が起こっていたからに他ならない。社会派推理小説が隆盛する要因として資本主義社会の発展がある。イタリアでも 1960 年代から「奇跡の経済」と呼ばれて建設投機ブームがあり、農村から都市へと人口移動があった。

「黒い霧の国」の特集を書いたのはミケーレ・ティートという人物であるが、この特集の背景の手がかりとして、東洋学者フォスコ・マライーニ（1912-2004）の『随筆日本　イタリア人の見た昭和の日本（原題 Ore giapponesi）[9]』を見てみよう。1953 年の日本滞在時を中心に描かれ、1957 年イタリアで出版された。

作家や芸術家の作品の内には、深い西洋化の跡が見られることもある。たとえば夏目漱石や三島由紀夫を読めば、欧米の文化が完全に消化されているのがわかる。特殊な西洋化とでもいうべきか、微妙なのは黒澤明の場合だろう。この古狸は西洋人が何を好むのか、つまり彼らを有頂天にさせるものが何かをよく理解し、それを『影武者』や『乱』のような騎士物語の壮大な織物に仕立てたのであるが……結局のところ彼の真意はなんだったのだろう。彼の作品の多くは日本では人気がない。「ガイジンくさい、洋物って感じだね！」と彼らは言うのである。（マライーニ 邦訳 2009: 28）

1970 年以前、日本の国外で三島の名前を知っている人はそれほど多くなかったはずだ。11 月 25 日の正午の、奇抜で、グロテスクで、不条理で、崇高で、狂気の沙汰としか思えないニュースとともに文学者三島の名は世界中に知れわたるようになった。(…)　元来自殺とは絶望の末の行為のはずが、三島の場合はこれとは違ったことがすぐに知られた。彼の自殺は儀礼にほかならなかった。演劇的効果も含めて長い熟考の末、サーカスかオリンピック級のアクロバットを思わせる高度なテクニックと絶妙なタイミングをもって実行に移された儀礼だったのだ。(…)長い間、三島の行為が日本軍国主義の再生のしるしなのではないかと議論されたが、そうこう

[9]『随筆日本』(1957 年)は 1953 年の滞在時を中心に書かれ、マライーニ自身による読み直しは 1988 年（Milano, Dall'Oglio 版）、さらには 2000 年に Casa editrice Corbaccio より日本に関する文献目録を添えて出版された。2009 年翻訳『随筆日本 イタリア人の見た昭和の日本』が松籟社より出版されている。

するうちに三島は最後のサムライの系譜に位置づけられるようになった（マライーニ 邦訳 2009: 487-489）

『金色夜叉』は小説も映画も、どんな分析研究よりもはっきりと二つの要素を提示している。日本社会の表面下に潜み、危機の時代の出来事を色濃く特徴づける二つの要素。いずれも日本人の感性に基づく態度で、エロティックで肉欲的とさえ言える。ひとつは金に対する感性、もうひとつは暴力に対する感性である。(…) カネは多くの日本人にうずくような誘惑をそそる。(マライーニ 邦訳　2009: 689)

翻訳版のタイトル「随筆日本　イタリア人の見た昭和の日本」にもあるように、マライーニは戦前から戦後まで激動の日本を見てきたイタリア人の記録である。現在では評価がすっかり変わってしまった部分もあるが、鋭い洞察力を持って書かれている。イタリア人が日本をどう見ていたのか、という一端を窺い知ることができる。ミケーレ・ティートのインタビュー記事とフォスコ・マライーニの随筆には、日本人の金銭と暴力に対する感性が書かれている。

（3）リクルート事件

松本清張の名前は 1980 年代にも国際ニュースとともに取り上げられている。1980 年代後半に起こったリクルート事件に絡んだ記事である。「竹やぶで大金袋の謎　東京の林で、数十億[リラー引用者]」と見出しのついた記事は、日本人と金銭に対する感性を浮き彫りにする。札束を林に捨て、さらに人々が大金発見を求めて竹やぶに殺到する姿に、金銭に執着する姿と集団力もしくは団結力とでもいうべきものに驚きを見せる。

この国はリクルート事件で揺れ動き、卓越した政治家が巻き込まれた一方で、発見は事件から免れようとした者の側なのだと大方は推測している。他には、犯罪者側からの「資金」を送金しただの、暗部が窃盗団の中で合図を送っているだのとの推論もあった。お金は技術的には「きれい」で、帯封に書いてある銀行からきているのだが、元は「汚れて」いるのだ。

日曜午後、2 回目の発見ニュースが広まった少しあと、藪は襲撃の対象となり、半分は 100 人ほど期待に胸を膨らませて訪れたのであった。申し分のなく、驚くべき組織感覚で日本人全体が「別の 1 億円を探すクラブ」を設立し、成功した場合の規則も作った。

警察は藪を囲んだ。彼らには新生の協会や別の探索者に近づく権利が認められていない。多くの者が高速道路に沿った境界から近づいて竹藪を襲ったので大渋滞を生んだ。

(…)

警察以上に推理小説家がこの経緯について考えを巡らせており、その一人で最も有名な松本清張は、政治的補助金なのではないかと考えている。政治的代表者たちを襲ったリクルート事件勃発のこの時期を逃れたいと望む未知の受益者なのではな

いかと。この件に関して作家は、川崎で起こった発見を明らかにしようとする。この街で去年夏、小さい事件によって政府を押し倒すこととなる最初の事件が起こったのである。

皆が推理小説の解決可能性を探る一方、発見者 2 人は何らかの解決が来ないことを熱烈に望んでいる。もし 6 か月以内に正式な持ち主が現れなければ、袋を見つけた 2 人の市民には法律上所有権があるのだ。

竹やぶで大金袋の謎　東京の林で、数十億リラ
「ラ・スタンパ」, p5, 1989 年 4 月 18 日
（※下線部は執筆者による）

突如として竹やぶで見つかった大金は、政治に絡んだ金であると囁かれた。そして第 2 の 1 億円を求めて竹やぶに殺到し交通渋滞を引き起こした一般の日本人たちがいた。高官から市井まで金に対する飽くなき執着心を描写する。日本の現状を知るとき、松本清張はいつもその名があがる。そしてこれまでにテーティやマライーニが指摘した、日本人のカネと暴力への執着心を 1980 年代にも再び見ているのである。

小結

以上、イタリアにおける松本清張作品の受容について、日本文学翻訳事情や日伊の文化差異から考察を重ねてみた。『点と線』のイタリア語翻訳タイトル『死は時刻通り』は、常に鉄道の遅延が日常化しているイタリアにおいては、定時運行文化への驚きからつけられたと考えられる。さらにイタリアにおいて、日本への関心は 1960 年代に急激に高まっており、日本文学翻訳数の多さとなって顕れている。日本の推理小説も 1970 年を皮切りに現在まで、一定の間隔で翻訳されている。またイタリアのジャーナリズム界は、松本清張を文学界とは別の形で捉えていた。現代日本を知るヒントを松本清張に求め、日本人に金銭と暴力に対する独特の感性を見て取っていた。

第 2 章　イタリア推理小説と知識人

イタリアにおいて推理小説は様々な呼称で呼ばれている。ミステリーを意味する「ミステロ mistero」、警察小説を意味する「ロマンツォ・ポリツィエスコ romanzo poliziesco」のほかに、黄色を意味する「ジャッロ giallo」と呼ばれる。ジャッロ（黄色）はモンダドーリ出版のミステリー叢書の表紙の色に由来する。現在、イタリアの書店は推理小説の棚は充実しており、むしろ占有する割合が多いくらいである。イタリア人のミステリー好きを聞けば日本人には意外かもしれない。しかしミステリーの伝統があるのかと言えばそうではない。イタリアにおいて推理小説は長らく輸入ジャンルであった。

イタリアでの推理小説をいくつかの系統に分類すると、第 1 にジャッロ・モンダドーリ叢書に代表される大衆娯楽としての外国製ミステリーであり、1929 年に公式に開始された。第 2 に大衆娯楽としての国産ミステリーである。イタリアにおいては長らく国産ミステリーが育っておらず、1960 年のジョルジョ・シェルバネンコを待たねばならなかった。現在ではアンドレア・カミッレーリのモンタルバーノ警部シリーズが国際的な成功を収めており、キャラクターが確立されていることが特徴である。第 3 に知識人の描く“社会的責務 impegno”としてのミステリーである。これはイタリアでは 1960 年代にシャーシャによって始められたとみなされている。娯楽としての要素よりは、知識人の社会参加としての“社会派”推理小説と言えるであろう。さらに注目すべき点として 1980 年代よりイタリア人による推理小説論が多く出てきている点にある。続く 1990 年代に社会的意識をもって書かれた推理小説が再び登場する。この章ではイタリアにおける推理小説のはじまり、イタリアにおける推理小説論、1990 年代から作家や歴史家が推理小説の手法を用いて著作を発表し始めた流れについて考察していきたい。

第 1 節　イタリア推理小説のはじまり

イタリアにおける推理小説は 1900 年代初頭には確認されている。日刊新聞『コッリエーレ・デッラ・セーラ[10]』の別冊「今月の小説 Il Romanzo mensile」のなかで、アーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズなどの探偵小説が紹介された。「今月の小説」はイタリア初の大衆シリーズで 1903 年 4 月から 1945 年まで中断することなく続いた(D'Alessio 2012: 10) 。シャーロック・ホームズは 1903 年に第 3 作目として登場している。

その後イタリアにおいて推理小説を普及させたのは、モンダドーリ出版のミステリー叢書によるところが大きい。1929 年 9 月 16 日ミラノのモンダドーリ出版[11]が最初のミステ

---

10 *Corriere della sera* は 1876 年ミラノにて創刊された日刊新聞であり、現在イタリアにおいて最も重要な新聞として認識されている。

11 アーノルド・モンダドーリ Arnold Mondadori(1889-1971)によって創業された。アーノルド・モンダドーリは北イタリア・マントヴァ近くのポッジョ・ルスコにて、農民で無学の父と、教養ある母のあいだに生まれる。無声映画のアナウンサーなどの職を経て、兄弟とともに 1912 年に小さな工房を設ける。現在ヨーロッパで最も大きな多角経営の出版社である。

リー叢書「黄表紙本 I libri gialli」という名の叢書を売り出した。ロレンツィオ・モンターノ[12]の考案によるものであった。黄色い表紙は目立つようにとの意図があり、最初の 4 作品を送り出した。S.S.ヴァン・ダインの『ベンスン殺人事件 *La strana morte del signor Benson*』(原題 *The Benson Murder Case*, 1926 年)、エドガー・ウォーレスの『モロプロスの殺人 *L'Uomo dai due corpi*』(原題 *Captains of Souls,* 1923 年)、ロバート・ルイス・スティーブンソン『自殺クラブ Il club dei suicidi』(原題 *The Suicide Club,*1878 年)、アンナ・キャサリン・グリーンの『ふたりのいとこの謎 Il mistero delle due cugine』(原題 *The Leavenworth Case: a Lawyer's Story*,1878 年) の 4 作品で読者の好みを探る狙いもあった。「黄表紙本」は 1929 年から 1941 年までに 266 作品を翻訳した。その中にはアガサ・クリスティやエラリー・クイーンなどが含まれる。「ジャッロ giallo」 はイタリア語で「黄色」を意味し、モンダドーリ出版の「黄表紙本 I libri gialli」」とともにこのジャンルを指す言葉となり、英語の「探偵小説 ditective nobel」やフランス語の「警察小説 romance policière」 の呼称にとって代わった。1930 年代の「黄表紙」叢書は主に英米仏の翻訳からなっていた。「英国探偵小説は、「上位中流階級の読者たち【知識人、大学人】の嗜好に応じた保守的ジャンル」 (Tani 訳 1990: 42)であった。一方アメリカでは亜種ともいえる変格探偵小説ハードボイルド派が 1920 年代末から 1930 年代にかけてパルプ雑誌『ブラック・マスク』で盛り上がっていた。フランスではジョルジョ・シムノンが流行っており、イタリアにも輸入された。続く 1940 年代はファシスト政権下において 1941 年に探偵小説の販売が制限され、犯罪を弁護するものなどと道徳的な理由が色々つけられて 1943 年には公的に発禁となる。

第二次世界大戦後はアメリカのスリラー[13]が押し寄せるように輸入された。イタリア製の推理小説はあるにはあったが、読者には見向きもされなかった。モンダドーリ出版は停刊していた「黄表紙」叢書を「イル・ジャッロ・モンダドーリ Il Giallo Mondadori」というシリーズ名に改め直して 1946 年に再開し、現在に至っている。その数は 2016 年現在で 3100 作品を超える。海外の有名な推理小説を扱い (抄訳・全訳)、イタリア人が海外推理小説を知る機会となっていたのである。新聞雑誌売店のみで販売され、本屋では売られていない。 ペーパーバックであり、週刊で発売されており、シリーズにおける再版はない。

イタリア国産の探偵小説が確立してきたのは 1960 年代になってやっと、ジョルジョ・シェルバネンコの登場による。「奇跡の経済」と呼ばれるイタリアの好景気とも関係しており、イタリアの社会的状況が、ハードボイルド小説の本家のアメリカの社会状況に追いついたことによる。シェルバネンコはレイモンド・チャンドラーやダシール・ハメットのようなアメリカ製のハードボイルドを、ヨーロッパにおけるニューヨークのような活況を帯びてきたミラノに移植しようとした。(Tani 訳 1990: 53-54)

---

[12] Lorenzo Montano 1930 年代～1940 年代のモンダドーリ出版に関わる。1919 年創刊の文芸誌「ロンダ *Ronda*」の創始者のひとりであり、アングロサクソン文学に深く精通していた。

[13]「犯罪もの crime story」のことを指す。「猛烈な暴力で読者にショックを与える」(Tani 訳 1990: 50) ミステリーである。

第 2 節　推理小説論の隆盛

（1）グラムシが言及した推理小説の可能性

イタリアは推理小説の分野においては後進国であったが、2000 年前後よりミステリー分野において国際的な躍進が目覚ましく、アンドレア・カミッレーリの「モンタルバーノ警部シリーズ」はドラマ化されてヨーロッパ各国で放映され人気を博している。近年ではイタリア人作家が国際的な賞を獲得している。この隆興はいくつもの段階を経て、現在の躍進に至っていると考えられる。そして新たな推理小説の流れが生み出されるときには、いつも推理小説論も生まれているのである。

古くはアントニオ・グラムシが、イタリアの推理小説の可能性について『獄中ノート Quaderni del carcere [14]』（1927－1939 年の投獄生活で書かれた）で預言をしていた。1861 年に国家統一されたイタリアが、ナショナル・アイデンティティを確立するには大衆文化の型の発展が必要で、推理小説がこのプロセスの一部となる可能性があるというのだ（Castagnino 2014: 7）。実際にグラムシの預言が現実となるかのように、1929 年創刊のジャッロ・モンダドーリ叢書などの安価なペーパーバックの普及によって大衆に愛される娯楽として発展していった。さらに映画の分野においても、性と暴力を特徴とする独自のジャッロ giallo というジャンルを生み出した。ファシズム下で推理小説が「犯罪を助長するもの」ということで一時発禁となった。第二次世界大戦が終わり解禁となると再び大衆娯楽としての人気を取り戻したが、外国産に圧されて、国産の推理小説は空白期を迎える。

（2）1950 年代のシャーシャの推理小説論

1950 年代には作家レオナルド・シャーシャが推理小説論を書いた。1953 年の「“探偵小説”の文学 Letteratura del «giallo»」では、純文学の作家と探偵小説家が相互に与えた影響について書いている。イタリアの推理小説に関しても触れており、ロンガネージ出版はダシール・ハメットの作品を押し、ガルザンティ出版はミッキー・スピレーンを押していていること、カジーニ出版とモンダドーリ出版は溢れるほどにミステリー叢書を供給していることに言及している。さらに英国探偵小説にはない特徴をアメリカの推理小説に見出している。「すでにポーの中にジャーナリスト - 探偵の性質があった。それはアメリカにおいて成長し、多くの探偵小説の作家が自分たちの物語の主人公に選んだ性質であった[15]」としている。(Sciascia 1953: 65)。ジャーナリズムというと、シャーシャ自身も 1955 年からシチリアの新聞『オーラ *L'Ora*』（1900 年 4 月 22 日創刊～1992 年 5 月 9 日廃刊）に関わる。パレルモに本拠地をおき、マフィアを初めて告発した新聞であった。1954 年に編集

---

[14] アントニオ・グラムシ Antonio Gramsci (1891-1937) が獄中で書いていたノートは、グラムシの死後、イタリア共産党書記長パルミーロ・トリアッティの指示によって整理されて、「アントニオ・グラムシ著作集」に織り込まれて 1948 年から 1951 年に公刊された。（上村 2009: 414）

[15] （原文）C'era gia in Poe la stoffa di quei giornalisti-detective che allignano negli Stati Uniti e che molti scrittori di *gialli* eleggono a protagonisti delle loro sotrie.

長に就任したばかりのヴィットーリオ・ニスティコが、シャーシャに執筆依頼をしたことがきっかけであった。『オーラ』を通して、「探偵－ジャーナリスト」の意識はシャーシャ自身のなかでも育っていった。

1954 年に書いた「メグレ警部の昇進　La carriera di Maigret」では、“フランスはシムノンの小説に国産の推理小説を見出した”というアルベルト・サヴィーニオの言葉を取り上げ、イタリアにはまだ国産の推理小説が育っていないことに触れている。サヴィーニオの言葉は、20 年前にイタリア人に紹介されたとき用いられたものであった（Sciascia 1954b: 73）。

同じく 1954 年に書いた「推理小説に関する覚え書き Appunti sul «giallo»」では、イタリア人文芸評論家ジュゼッペ・プレッツォリーニの観察を取り上げ、“コンメディア・デッラルテ（イタリアの仮面即興劇）の仮面役者と、探偵小説の警官や犯罪者の型には明らかな類似点があり、主人公はいつも同じ行動様式を取っていることー探偵は年を取らず、結婚せず、子どもを持たず、弟子を取らず、初めからまた出来事を始めるー”に触れた(Sciascia 1954a: 30)。このような推理小説論を踏まえた上で、自身の作品『真昼のふくろう』（1961 年）に始まる推理小説の手法を使った作品が登場していくのである。

（３）1980 年代から今日までの興隆

1980 年代には新たな動きが起こる[16]。ミステリー分野では後進国であったイタリアで探偵小説論が盛んになってくる。カルロ・ギンズブルグ「徴候－推論的範例（パラダイム）の根源 Spie. Radice di un paradigma indiziario」（1979 年）、ロリス・ランベッリ「イタリア推理小説史 *Storia del "giallo" italiano* 」（1979 年）、レンツォ・クレマンテとロリス・ランベッリによる「犯罪の筋立て：推理小説の理論と分析 *La Trama del delitto: teoria e analisi del racconto poliziesco*」（1980 年）、フランコ・モレッティのエッセーが集められ英訳された『記号と奇跡 *Signs Taken for Wonders*』（1983 年）、ウンベルト・エーコ／トマス・A・シービオク編『三人の記号 *The sign of three: Dupin, Holmes, Peirce*』（1984 年）、ステファノ・ターニ『やぶれさる探偵 *The doomed detective: The Contribution of the Detective Novel to Postmodern America and Italian Fiction*』（1984 年）、パスクァーレ・アッカードの『シャーロック・ホームズが誤診する *Diagnosis and detection：the medical iconography of Sherlock Holmes*』（1987 年）など、イタリア人による推理小説論が花開

[16] 1990 年に研究者高山宏が自身の翻訳書のあとがきに書いた以下の言説を参照している。「アッカードにしてもターニにしても、やはり同じ東京図書刊の『三人の記号』のウンベルト・エーコにしても、この 80 年代になってイタリア人が急に探偵小説論のフィールドでにわかに目ざましい仕事をし始めたのがぼくには面白くてたまらないのだ。記号を読み解くシャーロック・ホームズの能力を同時代の記号論的環境の中に置いてみせたカルロ・ギンズブルグの記念碑的エッセー「徴候」も初出こそ 1979 年だが、論集『神話・寓意・徴候』に収められて一挙に読者を獲得するのは 86 年以降のことである。同じくフランコ・モレッティのすばらしいシャーロック・ホームズ論「手掛り」がローマで出たのが 1978 年。モレッティのエッセーが集められ英訳されて名著『記号と奇跡』がこれに収められて流布していくのが 83 年のことだったはず。枚挙にいとまがない」(ステファノ・ターニ『やぶれさる探偵』訳者あとがき 1990: 275)。

いた年代であった。

このイタリアにおける推理小説論の隆盛は、やがて 1990 年代に起こった新たなイタリア推理小説の前兆ともなっている。純文学作家のアントニオ・タブッキやダーチャ・マライーニが自ら、推理小説の手法を用いて作品を発表したのだ。さらには国際的に人気を博することとなったイタリア国産探偵モンタルバーノ警部シリーズ（1994 年～）が生まれる。

イタリア推理小説研究に新たな展望を示したステファノ・ターニ[17]とアンジェロ・カスタニーノ[18]の著作を取り上げておきたい。両者ともイタリアの大学で学び、のちに博士号をアメリカで取得している。

研究者ステファノ・ターニが『やぶれさる探偵』（1984 年）で論じたのは、1940 年代から 1960 年代にかけて世界的に起こった文学の流れである。それまで二流とみなされていた探偵小説の手法を純文学作家たちが使い始めた。その結果彼らは、探偵小説の暗黙ルールであった「謎が解けること」「勝利する探偵」ではなく、「解けざる謎」と「敗れさる探偵」という「反-探偵小説」を創り出した。ホルヘ・ルイス・ボルヘスやレオナルド・シャーシャ、ウンベルト・エーコらの名前を挙げている。

2014 年に研究者アンジェロ・カスタニーノが『探偵としての知識人:レオナルド・シャーシャからロベルト・サヴィアーノまで』（2014 年）で論じたのは、1960 年代から今日までのイタリア小説における探偵としての知識人の特徴である。カスタニーノ論文が取り上げるのは、レオナルド・シャーシャに始まり、アントニオ・タブッキの『供述によるとペレイラは *Sostiene Pereira*』（1994 年）、ダーチャ・マライーニの『声 *Voci*』（1994 年）、ロベルト・サヴィアーノの『ゴモラ *Gomorra*[19]』（2006 年）などである。カスタニーノの主題は、なぜ多くの重要な小説家たちがここ 60 年ほどのあいだに、調査官として自身を小説の中に描く緊急性を感じたのか、ということである。そしてこのことが戦後から今日までイタリアを特徴づけてきた歴史的な出来事に絡んでいる、と説明している。この期間あらゆる作家たちが知識人の社会的役目や、国家機関との結びつき、繰り返し発生する彼らの孤立状態を映し出す目的で犯罪小説を用いたとしている。さらに戦後のイタリア人作家が、公共の主人公たちが国について語るのを本格的に望んだことやイタリアの知識人とミステリーの関係を論じている。「知識人 intelletuale」論とシャーシャを絡めた研究は、ジョセフ・フランチェーゼの『レオナルド・シャーシャと知識人の社会的役割』

---

17 Stefano Tani (1953－)フィレンツェで生まれる。フィレンツェ大学でアメリカ文学を学んで学士号を取得し、渡米しドゥルー大学で英米文学を専攻して修士号を取得、ニューヨーク州立大学で比較文学を修めて博士号を取得した（Tani 訳 1990: 276）

18 Angelo Castagnino カターニア大学（学士号）、トリノ大学（修士号）、ノース・カロライナ大学チャペルヒル校（博士号）で学んでいる。

19 イタリアにおける三大犯罪組織マフィア、ンドランゲタとならぶ、ナポリのカモッラの実態と犯罪について書いている。聖書に出てくるソドムとゴモラから来ている。犯罪組織カモッラに牛耳られるナポリを滅びゆく都市ゴモラに見立てたのだ。サヴィアーノは作者自らが探偵として登場する。そして『ゴモラ』発表後、カモッラに命を狙われ毎日寝床をかえなければならない。パゾリーニの遺産を受け継いでいるとする。パゾリーニの「私は知っている Io so (…)」で始まる 1974 年の著名な記事“Che cos'è questo golpe?”へのオマージュをみせる。

（2012 年）にも見られるように、近年の傾向と見られる。カスタニーノ論によると、シャーシャは、出版的な成功にたどり着いた最初の作家だとみなされている[20]。カスタニーノはシャーシャ作品の探偵が「isolated 孤独な存在」であったことを指摘している。それはシャーシャ自身の立場ともつながるものがあり、シャーシャは次のように言及している。

> 今日私の立場はどちらかというと特異なものとなっている。それはいつも肉体的感覚にあった文化的中心や学派・グループからの隔たりによるものと言えよう。そして今日文学的思想の流れに関してもそうだ[21]。
>
> 1964 年 9 月 27 日『ウニタ』

カスタニーノはシャーシャの描く探偵が 1960 年代・70 年代・80 年代と経ていくにしたがって、時代に合わせて変容していることを述べている。1960 年代のシャーシャの探偵は「孤立した isolated」存在であった。『真昼のふくろう』では、イタリア北部出身のベッローディ大尉がシチリアにやってきて事件を解決しようとするがマフィアに阻まれ、マフィアの報復を恐れたシチリアの人々の協力も得られず、孤軍奮闘する姿を描いている。イタリアの経済ブームとその矛盾を虚構として描き、北部の産業都市が経済的発展によって特徴づけられて多くの新参者を惹きつける一方で、南部では国家の経済成長が作用しないかのように描かれた。1970 年代は奇跡の経済に続く時代であり、『権力の朝』や『トード・モード』を描くことによって、イタリア人は国家機関が秘密の違法な事件に関与していることに初めて気が付いたのである。1980 年は育った場所の文化的背景にしっかりと結びつけられた（逃れられない）探偵が登場する。推理小説に表象される探偵像とは、時代が求めてきた知識人の姿に他ならないことをカスタニーノは主張する。

第 3 節　1990 年代の作品群

1990 年代に入ると、アントニオ・タブッキの『供述によるとペレイラは *Sostiene Pereira*』（1994 年）、ダーチャ・マライーニの『声 *Voci*』（1994 年）などの作品が登場する。純文学作家が推理小説の手法を使った作品を発表し始めたのだ。さらに歴史家カルロ・ギンズブルグの『裁判官と歴史家 *Il giudice e lo storico*』（1991 年）を発表している。

アントニオ・タブッキの『供述によるとペレイラは』は、ファシズムの影が忍びよるポ

---

[20] 「シャーシャ以前は犯罪小説の生産は、海外で作られ、その後イタリアに適応した、ありふれたまがい物だとみなされていた。シャーシャのおかげでイタリア探偵小説が例外的に価値あるものもあり、シャーシャの推理小説では、知識人と調査官の一致はいつも明らかで、文化的役割やイタリア社会について著者の意見を論じたりする」(Castagnino 2014: 16)

[21]（原文）La mia posizione risulta oggi piuttosuto eccentrico. Lo è sempre stata in senso fisico, direi: per la mia lontananza dai centri culturali, dalle scuola, dai gruppi; oggi lo è anche in rapporto al corso delle idee letterarie.　27 settembre 1964, «L'Unità», p12

ルトガルが舞台となっている。リスボンの小新聞社の中年文芸主任ペレイラは、用心深く体制に従っている。しかし、ひと組の若い男女との出会いによって、ジャーナリストとして全体主義に立ち向かっていく決心をする。ペレイラが冒頭から飲んでいるレモネードは物語の一つの鍵にもなるのだが、終盤ではその量に読者も驚かされる。彼はジャーナリストでありながら体制に従うという違和感にさいなまれつつも、大量のレモネードによってなんとか精神のバランスを保っていたのである。

ダーチャ・マライーニの『声』は、イタリアで多発していた凶悪犯罪を扱い、その被害者の多くが女性であることを取り上げた。主人公はミケーラ・カノーヴァというラジオ局で働く女性記者である。ある日隣に住む若い女性が殺害されているのを発見する。おりしも上司から頻発する女性犯罪に対して番組編成を命じられ、隣人に起こった事件の解明と絡まり物語は進行していく。ミケーラは様々な人物の「声」を証言として記録していく。様々な人間が色々な証言をするのだが「それぞれの声に、真実の響きがある」と最後にマライーニは書いている。人間の心理とともに証言の複雑さと曖昧さを浮かび上がらせている。

カルロ・ギンズブルグの『裁判官と歴史家』は、歴史家ギンズブルグの友人アドリアーノ・ソフリが、16 年前に起こった左翼運動さなかの警視殺害の黒幕として逮捕されたことに対し、友人の冤罪を証明と、かねてからのテーマであった裁判官と歴史家の曖昧な関係を考察している。16～17 世紀の異端裁判記録を研究対象としている著者が、今回の裁判記録を読み解きながら、3～4 世紀前の異端裁判と何ら変わっておらず、共犯事実証言が決定的な重要性を持っていることを指摘する。今回の裁判では、取り調べ官たちが自分の不注意を隠そうとして、いいかげんな証言に満点をつけ、また裁判長の指揮のもと間違った方向へと進められた裁判だとしている。さらにギンズブルグが関心を寄せる裁判官と歴史家について、共通点は証拠を使用するという点で、相違点としては歴史家は資料の解読はできるが、資料の生産に参加することができない点だとしている。『裁判官と歴史家』は、レオナルド・シャーシャの『モロ事件 *L'affaire Moro*』（1978 年）の流れを引くと考えられる。実際に起った事件を取り上げノン・フィクションで書いている。ただしその記述には大きな違いがある。ギンズブルグが裁判記録をもとに関係者の行動や発言など事件の再現を試みていることに対し、シャーシャは文学的な引用を用いつつ囚われの身となったモロの心情に焦点を当てている。

これら 1990 年代の社会背景として、1989 年の東西冷戦構造の終焉がありイタリアにも様々な影響を及ぼし時代の転換点となったことがあげられる。1991 年イタリア共産党が消滅し「左翼民主党」となった。さらに 1994 年には戦後イタリア政治を担ってきたキリスト教民主党が解党して「イタリア人民党」が結成されている。1992 年には政界の実力者社会党のクラクシが基盤を置くミラノ市の汚職摘発に発端に、イタリア全土が汚職捜査で揺れ動いた。汚職の要因は、長期導入してきた政党と国営・公営企業の構造的癒着にあった。捜査のメスは政界だけにとどまらなかった。

またマフィア捜査にも進展があった。1992 年にマフィア撲滅に立ち向かっていた法務省刑事局長ジョヴァンニ・ファルコーネとマフィア捜査専従班パオロ・ボルセリーノがマフィアに相次いで暗殺され、人々のあいだにこれまでにないマフィアへの怒りと、マフィア捜査を妨害してきた政治家や司法当局にも批判の目が向けられることになった。7 度首

相を務めたキリスト教民主党のジュリオ・アンドレオッティがマフィアへの関与容疑で起訴された。裁判は無罪に終わったが、マフィアに関する神話が一掃され人々のマフィアへの認識が変化した。一連の流れの背景には1980年代にマフィアの内部抗争の激化があり、争いに敗北したブシェッタの告白によりマフィアの内情が知られるようになっていたこともある。1986年にマフィア裁判が行われ342人有罪判決が出ており、被告側の控訴は1992年に棄却された。マフィアはキリスト教民主党が 1950 年代に導入した統治システムに関与しており、マフィア裁判の報復・警告として、1992年に首相アンドレオッティの側近であるパレルモ議会議員リーマが殺害されている。それまでマフィアの裁判は上部権力の介入によって上告審で無罪となってきたからであった（北村編 2008: 533-534）。

1980 年代がイタリアにおける推理小説論の興隆の時代ならば、1990 年代は推理小説を使った知識人の行動の時代だったと言えるのではないか。

さらに国を超えた 1990 年代の動きとして、エドワード・サイード『知識人とは何か』（1994 年）を取り上げておく。サイードは知識人について以下のように言及している。

「[知識人とはー引用者]亡命者にして周辺的存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である」（サイード 翻訳 1995: 12）と書いている。

この言葉はレオナルド・シャーシャのインタビュー記事（1982 年）と通底するものがある。

> ･･･社会の中での、その役割を考えてみると、作家は反対意見を表明するもの、つまりいかなる種類のものであれ、権力に対して異議申し立てを行う存在だ。社会の中では常に反対意見の表明が必要とされる。この役割を担うものは何よりも作家だ[22]

「作家」という言葉を「知識人」という言葉に置き換えてみると、シャーシャの知識人というものに対しての考え方が示されていると言えよう。レオナルド・シャーシャの 1967 年 11 月 24 日共産党機関誌『リナッシタ Rinascità』に、「社会的責務と社会的無関心のあいだ Tra impegno e disimpegno」という見出しの記事を寄せた。

> 私は社会参加の時代に書くことを始め、社会的無関心の時代に書くことを続けている。社会参加について考慮しなかった（了解済みのこととして）。そして社会的無関心についても考慮していない。あるいは社会的無関心の社会参加、社会参加の社会的無関心等々。

ここで書かれる社会参加とはファシズム解放前夜に起こった、熱気と興奮を指しているのだが、アンジェロ・カスタニーノも論じていたように、1990 年代にも「社会参加」の必要を感じた時代であったのだろう。であるからこそ、知識人たちがその著作において、自身の社会参加をすることとなったのだ。

---

[22]『朝日ジャーナル』掲載インタビュー（1982 年 7 月 16 日号）。対談／訳は竹山博英。

小結

以上、イタリアにおける推理小説の歴史と、推理小説論、1990 年代に出現した新たな推理小説について論じてきた。イタリアにおいて推理小説は、ジャッロ・モンダドーリ叢書などによって大衆娯楽として普及した。しかし自国の推理小説が発展し始めるのは 1960 年代に入ってからである。また 1940 年から 1960 年代には、純文学の作家が推理小説の手法を使って作品を書く、という世界的な文学の流れも起こり、この流れに身を置くシャーシャはまだ「孤立した存在」であった。1980 年代に入って、推理小説論の分野でイタリア人が活躍し始める。さらに 1990 年代には冷戦構造の崩壊と前後して、イタリア社会が大きく揺れ、再び知識人自ら立ち上がらねばという気運が高まり、推理小説の手法を使った著作が発表されていったと考えられる。

第 3 章　松本清張とレオナルド・シャーシャの近似性

松本清張が海外を舞台にした『霧の会議』（1984～1986 年『読売新聞』連載）は、1982 年ロンドンで起こったイタリア人銀行頭取ロベルト・カルヴィの怪死と国際金融事件を背景に描いた作品である。この事件は聖なるヴァチカンの銀行がマフィアの資金洗浄に関わっていたという一大スキャンダルに発展していく。

『霧の会議』は 3 つの展開に分けることができる。前半はイタリア人銀行頭取ロベルト・カルヴィ（作品ではリカルド・ネルビ）がロンドンのテムズ川にかかる、「修道士」の意味を持つブラックフライアーズ橋で遺体となって発見されるに至るまでの過程を描いている。日本人男女による目撃、ローマ支局の日本人ジャーナリストによる張り込みという推理小説仕立てのフィクションの視点を添えて大胆に推理した体裁をとっている。当時から疑問のあったカルヴィの怪死を他殺と捉え、発見場所となったブラックフライアーズ橋の下にどのように移動させたのかということや、カルヴィの遺体状況からマフィアの手によって消されたのではないかということに踏み込んで物語を展開している。

中盤を成すのが精神武装世界会議であり、開催広告が小説前半から度々織り込まれ、開催地モンテカルロに登場人物たちが集結していく。会場の超一流ホテル・エルミタージュに割り当てられたのは、アルゼンチン、ウルグアイといった中南米からのラテン系の会員であった。中南米にはイタリア人の移民が多い。会議の前列の大半がイタリア人、ラテン系で占められた会議の正体は「会議の中の会議」であり、各地に散在している P2 組織再建連絡会議であった。なおこの「精神武装世界会議」は、「道徳再武装運動（MRA）」をモデルにしたものである。MRA のキリスト教精神に基づく平和運動は表むきで、宗教手段による世界制覇の謀略だという説が流れ、日本でも有名な戦後首相がその隠れた会員だったという臆説が流れたことに触れられている。精神武装世界会議の中心に立っているのは宗教者パオロ・アンゼリーニであるが、真の支配者ではなく担がれた宗教者であった。会議の費用に対する疑問が渦巻き、物語の終盤に明かされる国際金融にもつながっている。

終盤は、国際金融について描かれており、物語の舞台はスイス北部、リヒテンシュタイン公国へと移っていく。リヒテンシュタイン公国はタックスヘイブン（租税回避地）であり、それにより外国企業の誘致、外貨獲得が行われている。外国企業が税金逃れのために、ペーパーカンパニー（幽霊会社）を置き、またマネーロンダリングにも使われる。ペーパーカンパニーは「ノミニー・サービス（名義貸し）」「カストーディアン・サービス（投資業務の代行）」を行い、こうしたペーパーカンパニーを経由したお金は、真の振込み主をわからなくする仕組みともなっている。作品には、実態が私書函のみの、リヒテンシュタインにおかれた 2703 のペーパーカンパニーが登場する。松本清張は表には出てこない社会のカラクリを描く。ラリー・ガーヴィンの『誰が頭取を殺したか』や映画『ロベルト・カルヴィ暗殺事件』でも詳しい国際金融のからくりと、ロベルト・カルヴィの人物像や、カルヴィが頭取を務めたアンブロシアーノ銀行の実態を伺い知ることができる。カルヴィは、P2 のグランド・マスターであるジェッリを通じて、シチリア出身の銀行家ミケーレ・シンドーナ（『霧の会議』ではガブリエッレ・ロンドーナ）とビジネス・パートナーとなった。シンドーナは国際的な金融家として活躍し、ヴァチカン銀行総裁ポール・マルシンクス大司教とも懇意であった。その一方でアメリカやシチリアのマフィアとも親交があり、マフ

ィアの資金はシンドーナやカルヴィによって、ヴァチカン銀行に預金されてマネーロンダリングが行われ、投資に使われていた。しかし 1974 年、大株主だったフランクリン銀行の倒産によってシンドーナの歯車が狂っていき 1986 年刑務所内で毒殺される。カルヴィもシンドーナも口封じのためにジェッリに殺されたと言われている。1978 年新たにローマ教皇に選出されたヨハネ・パウロⅠ世は、ヴァチカン銀行の不透明な財政にメスを入れようとしたが、在位 33 日で急逝し、暗殺説がささやかれている。デヴィッド・ヤロップの『法王暗殺』や映画『ゴッドファーザーPARTⅢ』でも、このことが描かれている。

『霧の会議』の背景を見ていくと、マフィアーP2ーヴァチカンのつながり、つまり暴力組織―政治―宗教のつながりが見えてくる。このテーマはイタリア人作家レオナルド・シャーシャが作品で書き続けてきたことであった。松本清張とレオナルド・シャーシャは奇しくも作家活動期間が 1950 年から 1990 年前後と重なっており、作品に取り上げるテーマの共通点が多い。

ここでは、松本清張とレオナルド・シャーシャを対比しながら、両者の近似性について考察をすすめていくことにしたい。『霧の会議』に書かれた P2 の集まりをいち早く予見していた、レオナルド・シャーシャの 1974 年の著作『トード・モード』を中心に、松本清張との近似性を探っていく。要因として冷戦構造に置かれた資本主義社会であったことが大きく関係している。さらに近代以降に国家が歩んだ歴史も似ている。

また両作家とも宗教（信仰）に大いに興味を持ち続けた。約二千年長らえてきたキリスト教を、ローマ・カトリックのお膝元であるイタリア人シャーシャはどのように考えていたのだろうか。イタリアの歴史背景や作品から考察していく。

第 1 節　『トード・モード』で描いた戦後イタリア政治

松本清張の『霧の会議』で描かれる精神武装世界会議は、宗教という蓑に隠れた権力者たちの集まりであった。「精神武装世界会議」はイタリアのフリーメーソン「ロッジＰ2」の会議である。秘密結社 P2 は 1966 年頃に結成したと言われるが、長らく実態は謎に包まれていた。P2 のマスターであったリーチョ・ジェッリ[23]（『霧の会議』ではルチオ・アルディは元ファシストで、組織の根幹にあるのは、反社会主義、反共産主義である。しかし 1981 年に、ジェッリの自宅で P2 の秘密名簿が押収され、962 人の入会者の名が知られることになった。名簿には、政界、財界、官界、軍部、秘密情報機関、新聞、出版界の要人が名を連ねていて、イタリア全土を揺るがす一大スキャンダルとなった。P2 の存在発覚により、第二次世界大戦後イタリアの政権を握ってきたキリスト教民主党が後退した。ジェッリはカルヴィの死の 3 か月後、スイスで逮捕・拘置所に入れられるも、脱獄し、フランス、モンテカルロを経て南米に逃亡した。南米はイタリア移民の多いところで、P2 の安全な逃避

[23] Licio Gelli (1919-2015)　秘密警察と手を組んで、黒色（右翼）テロを画策し、1970 年代に起こった様々な事件に関与したといわれる。1969 年にミラノのフォンターナ広場にあるイタリア農業銀行が爆破され、死者 17 名を出した「フォンターナ事件」や、1980 年にボローニャ駅が爆破されて死者 86 人を出した「ボローニャ事件」がある。

場所だといわれている[24]。『霧の会議』の真の参加者とも関係してくる事項だ。

（1）P2 を予言した『トード・モード』

P2 発覚から遡る 1974 年、P2 の存在を予言するような小説が書かれていた。作家レオナルド・シャーシャの小説『トード・モード *Todo modo*』である。スペイン語で「あらゆる点で」という意味でエイウディ社から出版された。P2 存在の発覚とともに、『トード・モード』ですでにシャーシャの書いていたことが現実に存在することが証明された。『トード・モード』という題名は、イエズス会を創始したスペインのイグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）の著書『霊操[25]』（1548 年）、「悔悛と瞑想を通じ一片の疑いも挟まずに神に身をゆだねることすなわち心霊修行【exercita spiritualia】をこそカトリック精神に近づく「あらゆる点で」最良の道であるとして推挽した」（Tani 訳 1984：124）ことに由来している。

イエズス会は 1534 年に、イグナチオや同胞 6 名によって結成され、1540 年にローマ教皇の公認を得た修道会で、宗教改革の折にあって反宗教改革の先頭に立った。日本で布教したフランシスコ・ザビエルも創始者の一人である。イグナチオの『霊操』の影響により、それまで整備されていなかった霊操の方法が体系化されて（黙想や観想、口祷、祈祷など）、近代カトリシズムの特質のひとつとなった（コルバン編 2010: 350）。『霊操』は神秘体験を導く霊操指導者のための教本で、精神を鍛える「霊操」は約 4 週間にわたる観想のプログラムである（8 日間にも短くできる）。これらの知識を前提に『トード・モード』を見てみよう。

『トード・モード』では、最後まで名を明かすことのない画家の主人公がシチリアを旅していて、「ザフェールの修道院」と書かれた標識を目にして訪ねてみる気になったところから小説が始まる。主人公の画家が実際に着いてみると、そこは修道院でもありホテルでもあった。近くにいた若い司祭に何日か滞在したいと申し出るも、明後日には霊操のために特別なお客様がたくさんが来るからだめだと一旦断られてしまう。以下の本文の会話は画家と司祭が霊操の核心に触れていく場面である。

> 「霊操は」と司祭は繰り返した。「毎年 7 月の最後の日曜に予定どおりに順に行われます」
> 「どれくらい続くのですか？」
> 「1 週間です」
> 「何回行うのですか？」
> 「３～４回です。去年は 3 回で今年は 4 回です」
> 「信者は増えているのですね」
> 「もちろんです」と司祭は形式的に言ったが不確かなようだった。そして親密さを増して言った。「しかし最も重要なのは 1 回目です」

24　徳岡孝夫「解説」『松本清張全集 61』、p576。

25　1548 年にスペイン語原典からラテン語訳として出版され、30 か国語で 3000 版以上が刊行されている。（朝倉文市監訳 2014: 445）

「なぜですか？」

「大臣、代議士、大統領、銀行や企業の取締役が来ます…それに 3 人の新聞編集長も」

この後主人公の画家は、修道院の悪魔的カリスマ性を持つ司祭ドン・ガエターノに許可をもらい滞在できることになった。ここでは霊操と称して、政治家、国務大臣、企業家、高位聖職者などの権力者たちが集まってきており、本当の目的は霊操などではなく、新たに権力をより良く分配することにあった。しかし殺人事件がおこることによって、大混乱に陥る。最初の殺人は客全員が隊列を組みロザリオの祈りを唱えているときに起った。殺害されたのは元国会議員であり国営企業の経営者でもあったミケロッツィであった。警察署長と地方検事のスカランブリがやってきて、隊列の位置関係から犯人を割り出そうとする。隊列でミケロッツィの隣にいた弁護士ヴォルトラーノが「いつもミケロッツィ氏が横にいたわけでない」と犯人を知っているかのような口ぶりを示す。翌日弁護士ヴォルトラーノが殺害される。修道院の 8 階のテラスから突き落とされたのであった。さらに次の日司祭ドン・ガエターノが遺体となって森で発見され、そばにはピストルが転がっていた。地方検事はさらなる殺人を防ぐため修道院を封鎖し事件を検証する。アリバイを聞かれた画家は冗談交じりにガエターノ殺しを仄めかすが、地方検事の結論は残っている者のアリバイはどうとだって言えるし、動機を探さなればならないと歯切れの悪い言葉で会話は終わり、最後に『法王庁の抜け穴』の長い引用で閉められる。ここで描かれるのは、宗教と政治権力の関係だ。研究者ステファノ・ターニは「ドン・ガエターノの「修道院」が象徴しているのは権力と宗教の共謀関係である」とする。松本清張が描いた『霧の会議』の「精神武装世界会議」は、まさに『トード・モード』のザフェールの修道院の集まりとも重なる。

（2）『トード・モード』のモデルー霊操

『トード・モード』の着想はシャーシャの実体験による。1970 年夏、シャーシャはシチリア島東部の街カターニアから数キロの距離に実在するザッフェラーナ・エトネアのサレジオ会経営のホテルに泊まった。その時に出くわしたのが奇妙な霊操で、参加者のほとんどがシチリア州都パレルモの良く知られたキリスト教民主党員たちであった。彼らは毎晩ホテル前の広場でロザリオの祈りを唱えながら前後に隊列を組んで動きまわっていたのであった。このときの体験をぼかしながら書いた記事が「霊操 Esercizi spirituali」で、全国紙『コッリエーレ・デッラ・セーラ』の 1971 年 9 月 24 日 3 ページに掲載された(OA: 1187-1888)。

私は以前夏に、山中のホテルに滞在したことがある。宗門寄宿学校の元生徒が霊操のために毎年集まる場所で、彼らの一部はある「社会階層」を成している。(…)

別々に元生徒たちは到着した。そしてホテルの前の空き地で大きな車から降りて、驚きや喜びの表情をし、ふざけたり抱き合ったり肩をたたきあっていた。もしかしたら、前日の夜に街で分かれたのかもしれない。しかし毎年約束の再会は、一気に仲間

意識を呼び起こしていたのだろう。長時間のミサや説教、祈祷と引き換えに、彼らが期待しているものと考えるとよいのだろう。誰かが妻に付き添われてきたが入口までのことで、妻はそこで帰っていった。(…)

黙想、祈祷。毎回の説教のあと、彼らは各々の部屋に戻って熟考しなければならなかった。祈祷のあと遅くまで残っている者がいたら、厳しく司祭から叱責を受けた。「弁護士さん、あなたに驚いております！部屋に黙想しに行きなさい」。弁護士は自尊心を傷つけられて部屋に立ち去るのだった。夜には細々と灯りのついた原っぱで、来たりしながら全員でロザリオを唱えていた。敏捷な足取りで、不意に回れ右の号令でまごつき、もつれながらも。もつれればもつれるほど、「主の祈り」や「アヴェ・マリア」に声を張り上げるのであった。ヒステリーと恐怖をともなった口調であった（…)

最後に。ブリアンツァのカトリック信者が、会議の合間に感傷的に打ち明けた。「私はキリスト教民主党員です。カトリック信者はキリスト教民主党員となることができ、またそうなるべきだと信じていました。しかしここでは教会の犬のように感じます。見たところ、ここでは、良きカトリック信者はキリスト教民主党員ではないのかもしれません」

Esercizi spirituali, in «Nero su nero», AOⅡ, 943-947.

敢えて書いた「良きカトリック信者は、キリスト教民主党員ではないのかもしれない」という信者の話は、深い信仰と政党は別であるというシャーシャらしい強烈な皮肉にもなっている。『エスプレッソ』誌のインタビューに、この「霊操」について「キリスト教民主党だけのことを言ったのではなく、政治を行っているカトリック教徒について言及している」（OBⅡ：XLⅡ）とも述べている。

司祭に叱られる弁護士のエピソードは、『トード・モード』にも登場する。小説では、弁護士と国会議員が二人で話していると、まだここにいたのですかとドン・ガエターノに怒られ、“まるで盗み食いを見つけられた子どものように”二人は別れるのであった。修道院ではドン・ガエターノの権力は絶大で、権力者たちが言いなりになっている。

『トード・モード』について、作家イタロ・カルヴィーノは次のように感想を述べている。カルヴィーノはシャーシャと親交が深く、出版前の原稿を読んでいつも感想を述べていた。

昨日『トード・モード』を読んだ。まず少々、この司祭たちや群集、神学に我慢がならなかった。そしてこの件に関して最も強く書いてある推理小説ともキリスト教民主党のイタリア地獄ともいえる犯罪にすぐに熱中した。皆が言いたかったキリスト教民主党のイタリアを描いた小説で、君以前に書ける能力のある者はいなかった(OA Ⅰ：1890)

カルヴィーノが指す「キリスト教民主党のイタリア地獄」とは何であろうか。第二次世界大戦後のイタリアの歴史とキリスト教民主党について触れておく。キリスト教民主党 Democrazia Cristiana はイタリアのカトリック政党で 1943 年に結成された。キリスト教

民主党の長期政権は、1945 年 12 月に同党のデ・ガスペリを首相とする 6 党連立内閣が成立して以降、1981 年 6 月まで約 35 年間続いた。第二次世界大戦後、一党が政権与党の座にあり続けた点は、日本と類似している。なお 1981 年にはロッジ P2 発覚により、イタリアが 1945 年に共和国になって以来、キリスト教民主党以外の政党から首相が誕生した。1947 年には米ソの対立を軸とした自由主義陣営と社会主義陣営の緊張が高まり、冷戦がはじまる。キリスト教民主党は防共の意味からも自由主義陣営には重要な存在であった。

キリスト教民主党の統治システムは「クリエンテリズモ clientelismo」の言葉に代表される。1950 年代に経済の課題が戦後復興から改革・開発政策に移っていくと、土地改革公団を通じた土地の収用と分配により、12 万世帯の自営農を生み出した。改革公団と農民のあいだに、恩顧と依存のパトロンークライアント関係（クリエンテリズモ）が作られた。キリスト教民主党は、各種の公社・公団を通じて社会の諸分野にクリエンテリズモの強力なネットワークを作り上げ、主要な統治手段として用いた。7 年半続いたデ・ガスペリの時代が終わり 1953 年 6 月新世代のファンニーニが政権を取ると、それまで依存度の高かった教会から党の脱却を図った。キリスト教民主党を、国家機関と大衆団体にまたがる性格にした。公的資金を用いてクリエンテリズモを浸透させていった。公共・公団・事業団を通じて、各地域に補助やサービスをほどこし、これらの事業によって党資金を調達する仕組みであった。効率的な行政をもたらしたが、利益集団を生み出し、汚職を生みだしやすい統治システムであった。クリエンテリズモは、縁故主義、コネを意味する。キリスト教民主党は 1994 年 1 月に解党されてイタリア人民党を結成した。少数派の右派はキリスト教民主センターを結成している。（北原編 2008:505-545）

こうしたキリスト教民主党のイタリアが妥協の産物として生み出したのがドン・ガエターノである、とターニは言う。「相対立するものを和解させ、延命をはかってきたキリスト教 2000 年の濾過作用が生み出した」（Tani 訳: 125-126）人物であるとする。

またシャーシャ自身は『トード・モード』について以下のように述べている。

> 『トード・モード』は『権力の朝[26]』の別の側面だと言えるかもしれない。私は統治の仕方を見た。つまり統治ではなくカトリック的なのだ。そう、ふたつの歴史的妥協の対極にあるものだが、いつも逆説的でパロディーの様相だ。それは神学の内部のことで、私は深刻な扱いを避け軽く扱ってきた。だが明らかにジッドの『法王庁の抜け穴』をモデルとしていた…。私は推理小説の手法を使いながらも逆の意識を持っていた、なぜなら解決しない推理小説は実際には推理小説ではないのだから。しかし私の本は遊びがあり、冗談もあり、パロディーも持ち合わせている必要があったのだ(OA: 1896-1897[27])。

『トード・モード』と 1971 年発表の『権力の朝』は、対になる作品だと言われている。『権力の朝』は、どこかわからない仮想の国で事件を追う刑事たちが次々に殺害されていくという、ミステリー仕立ての作品である。その裏には本来は結びつくはずのない与野党

---

[26] 『権力の朝』は邦題。原題は『Il contesto (脈絡)』。

[27] *Un romanzo sui democristiani*, intervista a cura di Antonio Marta Di Fresco, in «Europeo», 16 gennaio 1975, p.53 からの重引。

が、実は裏で手を組んでいたという告発になっており、革命政党が革命を嫌がるという矛盾した会話で物語は終わる。『権力の朝』の出版により、それまでシャーシャと近い存在であったイタリア共産党との間に確執が生まれ、共産党新聞『ウニタ』や共産党誌『リナッシタ』での論争に発展した（のちに和解している）。しかし実際 1973 年にイタリア共産党とキリスト教民主党の妥協路線が共産党から提案されている。『トード・モード』発表から 2 年後、シャーシャは「キリスト教と無神論の唯物史観であるマルクス主義の一致は無分別である」（Pupo 2011: 71）と言及した。

なお『トード・モード』は 1976 年にエリオ・ペトリによって映画化されている。名優ジャン・マリア・ボロンテ演じる大統領が、「霊操」の集まりに参加し権力の保持を画策して失敗し殺害される姿は、1978 年に現実に起ったアルド・モーロの殺害を予言したとも言われている。アルド・モーロは与党・キリスト教民主党の党首（実質的にイタリアの首相）であり、1978 年 3 月 16 日「赤い旅団」と目されるテロリスト・グループに誘拐・監禁されたあと、55 日後にキリスト教民主党の本部とイタリア共産党本部のあいだの通りで遺体となって発見された。赤い旅団から、囚われた共産主義者たちと引き換えにモーロを返す用意があるというコミュニケが出たが、最終的にモーロ救出に「何もしないこと」を決めた党に見捨てられた形で殺害される。なおシャーシャは『モーロ事件』（1978 年）でこの事件についても書いている。モーロが誘拐されたのは、共産党の支持を得たキリスト教民主党のアンドレオッティ[28]内閣の信任投票が行われる日の朝であった。この内閣成立に貢献したアルド・モーロは誘拐・殺害され、遺体がキリスト教民主党とイタリア共産党の建物あいだの道で発見されたのは政治的矛盾の象徴的な出来事であったと言えよう。

1974 年に『トード・モード』が発表された背景には、離婚法をめぐって顕在化したイタリア人のカトリック離れがある。1970 年 12 月に長い会議の末に離婚法が成立した。伝統的な結婚観や家庭観に立つキリスト教民主党が離婚法に反対し、1974 年 5 月の国民投票に持ち込んで廃案を狙うも、結果は廃止反対（つまり離婚法支持）が 59.3％で、脱カトリック化が進んでいることが顕著となった。さらに人工中絶法が 1978 年に制定された。(北原敦編 2008: 524)1984 年 2 月には、カトリックを国教とする規定を削除した新政教協約がイタリアとヴァチカンのあいだで再締結されており、イタリアの国教ではなくなっている。（北原編 2008: 年表 54）

第 2 節　宗教的蠱惑の普遍性と聖職者へのまなざし

松本清張の宗教への関心は『火の路』や『眩人』、「神々の乱心」に代表される。宗教という壮大なフィクションが多くの人を動かした事例として、『霧の会議』で言及されたテンプル騎士団が出てくる。松本清張と同様にレオナルド・シャーシャもまた、宗教について興味を持ち続けた作家であった。両者の根底には、教団を運営する聖職者と信者の心情には大きな乖離がある、という認識がある。両作家の作品には、近代国家と向き合ってきた宗教の姿が書かれている。昨今宗教離れが言われているが、宗教の持つ魅力は姿かたちを

[28] Giulio Andreotti(1919-1913) 7 度首相に就いた政界の要人。マフィアとの関与が疑われたが、証拠不十分として無罪放免となっている。

変えて存在していく、という宗教的蠱惑の普遍性を示している。ここでは、シャーシャ作品に見られる宗教の描き方を見ていく。宗教の危機の時代に、新しい宗教が誕生するのは、既存の宗教が十分に機能していないことにある。生きるうえでの価値観の模索や、宗教的なものへの渇望がいつの時代にもあるということである。

（1）近代と対峙するキリスト教

19 世紀の近代国家の到来は、それまでのキリスト教的世界観を根底から揺るがすものであった。「人間が宗教をつくるのであり、宗教が人間をつくるのではない」、「[宗教は－引用者］民衆の阿片である」と、マルクスは「ヘーゲル法哲学批判・序説」（1844 年）に書いた（マルクス 訳 2010: 71-72）。なおマルクスはフォイエルバッハの「キリスト教の本質」に大きな影響を受けている。神の存在を信じることを前提としているキリスト教にとって、人間が宗教をつくったとする考えは大いなる脅威であった。

さらに 20 世紀に入りアントニオ・グラムシは、キリスト教の在り方について次のように書いている。

> イタリアのローマには、ヴァチカンがあって教皇がいる。自由主義国家は、教会の教権との均衡を保つシステムを見つけなければならなかった。労働者国家もまた均衡システムをみつけなければならないだろう[29]。

グラムシの文章に見られるのは、イタリアの国家統一以降、もはや教皇庁は絶対的な権力ではなくなったということである。また第二次世界大戦ではアウシュビッツの悪夢があり、神は何もなすことが出来なかった。

『トード・モード』はアンドレ・ジッド『法王庁の抜け穴』（1914 年）をモデルにしており、物語の最後は『法王庁の抜け穴』からの長い引用で締めくくられる。シャーシャが引用したのは、神秘体験によって回心したアンチームが、信仰を放棄し元の生活に戻っていく場面であった。研究者クロード・アンブロアーズはシャーシャがこの場面を最後に引用したことについて、「アンチームのように、シャーシャの画家も世俗の人間に戻っていく」場面だとしている（Ambroise 2000: 163）。

『法王庁の抜け穴』はキリスト教の信仰について書いた作品だ。「本当の法王様が捕らえられて、贋の法王が居座っている」という詐欺集団の流した秘密のデマに踊らされる人々の姿を描いている。例えば純真で善良なアメデ・フルーリッツソワールは法王様を救おうと、十字軍さながらに一人でローマに乗り込もうとする。しかし災難にあってなかなかローマにたどり着けない。ようやく着いたときには詐欺集団の首領プロトスが待ち構えておりアメデを言葉巧みに誘導し、しまいには同じ列車に乗り合わせたラフカディオに理由な

---

[29] «In Italia, a Roma, c'è il Vaticano, c'è il papa: lo Stato liberale ha dovuto trovare un sistema di equilibrio con potenza spirituale della Chiesa: lo Stato operaio dovrà anch'esso trovare un sistema di equilibrio.»(Il Vaticano e l' Italia: 7)

く列車から突き落とされて命を落としてしまう。なお理由なき殺人を犯す人物の系譜は『トード・モード』で、主人公の画家に流れている。

また科学実験に没頭するフリーメーソン団員アンチームは、宗教的神秘を体験し回心する。アンチームの回心は「異端放棄の宣誓」として神父に大々的に利用され、法王庁にまで話が届く。フリーメーソンの援助がなくなることを恐れたアンチームが「あなたのおかげで破産ですよ」と言うと、神父は「とんでもない」「われわれはあなたの魂に救いをもたらしているんですぞ、物質的なことだったら、ご心配なさるな、教会が補助してさしあげますからな」とうそぶく。しかし実際には教会の援助は受けられずアンチームは物質的な困窮に陥っていく。物語の後半で、「本当の法王様が捕らえられて、贋の法王が居座っている」という秘密のデマを信じたジュリウスがアンチームを元気づけようとこのことを告げると、「本物だが贋者だがしらないが」と真贋はどうでもよくなり、自分の身の始末は自分でつけると言い放ち、フリーメーソンの首領に手紙を書き、科学記事を再開すると宣言する。そして神秘体験とともに治っていた持病の足の痛みがまた始まっていくのである。

若林真の『法王庁の抜け穴』の解説に手助けを借りよう。

> 固定観念のとりこになった人間の悲劇ないし喜劇を、ジッドはこれまでずっと、あるいはソチ[30]の形式で、あるいはレシの形式で手を替え品を替え書きつづけてきたわけであるが、人間の最大の固定観念とは、神への信仰であろう。とりわけ、ローマ法王を神の代理人として崇め、他のいっさいを邪教として斥けかねないローマ・カトリック教徒は、ジッド的見地からすれば、最大の固定観念の囚人である。もしヴァチカン宮殿の聖座を現に占めている男が贋者で、本物の法王は宮殿の地下牢に幽閉されていたら、どうなるか。こんな仮定を立ててみるだけで、カトリック教徒の信仰を根底からゆるがすに十分だろう。ジッドはこのソチの大作で、それこそ「神をも畏れぬ」大胆不敵な仮定を立ててみたのである。(…) さて、詐欺団の首領プロトスは、こうした途方もない仮定の創造者、つまりフィクションの創造者であるが、愉快なことに、いや、恐ろしいことに、このフィクションが多くの人々を現実に動かしてしまう。(…) プロトスがでっちあげたフィクションが、現実には、このような由々しい悲劇[アメデの死—執筆者]を生み出してしまった。神という概念もまた、人間がでっちあげた壮大なフィクションなのではないか。ジッドはあえてそんな疑問を発することにより、神の観念を人間心理にことごとく還元してしまった。この作品がカトリック教徒たちの憤激の的となったのは、理の当然であろう。(ジッド 訳 1999：316-317)

十字軍や異端審問も魔女裁判もまた、宗教という壮大なフィクションから生まれた史実である。

『トード・モード』では修道院の食堂が大きな役割を果たすのだが、「ドン・ガエターノは信仰の殉教者ではないし、キリスト教民主党員たちは最後の晩餐を再現しているのではなく、“食べている”のだ」(Ambroise 2000: 166)。映画『トード・モード』では、食堂で

---

30 アンドレ・ジッドは、自作をソチ Sotie（中世の一種の茶番劇）や、レシ Récit（物語）、ロマン Roman（小説）と呼んでいた。(ジッド 訳 1963: 237)

一列に並んで食事をするシーンがあり、絵画「最後の晩餐」に似た光景が繰り広げられる。しかし見た目は似ていても、『トード・モード』では権力闘争の舞台である。ドン・ガエターノは、集会においてはキリスト教民主党員たちの父であり母であった（Ambroise 2000: 168）。イグナチオ・デ・ロヨラの『霊操』では、食事は自分を整えるものであるので、節制が必要だと説いている（門脇 訳 1995: 198）が、権力画策の場となっている『トード・モード』では、もはや節制どころではない。

（2）宗教的蠱惑の普遍性を描く

松本清張は『霧の会議』の中で、銀行業務を行っていたテンプル騎士団について繰り返し記述し、国際金融事件となったカルヴィ事件への布石を打っている。テンプル騎士団は、巡礼者の路銀を預かる銀行業務を国際規模で行い莫大な富を築いたと言われる。その富に目をつけ横取りしようとした美男王フィリップの策略によって、背教等の罪に陥れられる。無実を主張するも火刑となった。時のローマ教皇クレメンス 5 世は、圧力に屈してテンプル騎士団を見捨てる形となった。テンプル騎士団の廃絶の後、クレメンス 5 世と美男王フィリップ王の相次ぐ急死に、テンプル騎士団は財宝とともに神話となっていった。まさに信仰のために「殉教」した存在であった。

ヨーロッパの歴史はキリスト教と密接に結びついており、中世にはキリスト教文化は全盛を極め、また西欧諸国のキリスト教徒がエルサレム回復を目的としたイスラム教徒討伐のため十字軍遠征をおこなった。キリスト教は政治権力とも大きく結びつき、イタリアにおいては 4 世紀にキリスト教が国教となって以来、キリスト教文化が繁栄してきた。ローマの中に位置する世界で一番面積の小さい国ヴァチカンは、世界中に 12 億人の信者を抱えるローマ・カトリックの総本山である。「カトリック」とは「普遍的な」を意味する。イタリアの国家統一以来対立していた教皇庁と国家のあいだに、1929 年ラテラノ協約が結ばれ、和解と承認により、ヴァチカン市国が成立した。ヴァチカンは軍隊を持たないが、ローマ教皇の発言力は、中世ほど絶対的な政治権力ではないが現在でも外交を左右するソフトパワーとなっている。

シャーシャは「撤去 *Rimozione*」(1962 年)という短編で、キリスト教に入れ込む妻と、共産主義に入れ込む夫を描いた。街の聖人でもある聖フィロメーナ像撤去に反対して教会に立てこもる妻に対して、夫は冷ややかな視線を送る。しかしスターリン像撤去のニュースを知ると今度は夫がかなり動揺する。スターリンを崇拝する者たちがいて、「信仰」という点においては共産主義も大して変わらないと暗に示している作品だ[31]。もはや姿を変えた宗教という認識があったのではないだろうか。1956 年のフルシチョフ報告によるスターリン神話の崩壊は、イタリアの共産主義者が味わった苦い経験であった。共産主義については中編「スターリンの死 *La morte di Stalin*」（1957 年）でも描かれ、「どこか自分の話でもある」とシャーシャは言及している。「スターリンの死」の主人公は、熱心に崇拝していたスターリンが独裁者だったことに衝撃を受けるが、最後には「スターリンは死んだ。

[31] 現ローマ教皇フランシスコはユダヤ教のラビ・アブラハム・スコルカとの対談で、共産主義体制や資本主義についてアヘンと同じだと言及している。(『天と地の上で　教皇とラビの対話』2014 :164-165)

だが共産党はまだ生きている」と呟く言葉はどこか宗教に通じるものがある。カトリックにも共産主義にも懐疑的な目を向けている。なおシャーシャは共産主義に近い存在ではあったが、一度も共産主義者であったことはないと語っている。

『霧の会議』には白川敬之という、テンプル騎士団について詳しく語る教養豊かな国際人が登場する。そして白川の姪が女主人公の和子である。物語の後半、夫の死に対する罪の意識から日本に帰れない和子の存在は、西欧への憧憬と、ヨーロッパを彷徨う日本人の魂を感じさせる。和子はキリスト教で禁じられている自死によって最期を迎えたため、それまで彼女が身を寄せていた修道院に亡骸は埋葬されず、叔父の白川によって荼毘に付される。日本人の視点から見れば仏教的であり、キリスト教の観点からはテンプル騎士団の火刑である。東西の火に対する考え方の違いが表されている。

白川と和子の対比は、高度経済成長を経て、西欧に追いついた 1980 年代の日本の視点が感じられる。白川は国際人であるものの、仏教徒であり日本に根を置き、自分が何者なのかをしっかりと認識している人物なのである。国際的に自信を取り戻した日本の姿なのかもしれない。比べて、遺灰さえも異国の地をさすらう和子の存在は儚い存在である。『霧の会議』にはキリスト教文化に対する松本清張の視点が込められているのである。

（3）聖職者の姿

松本清張は聖職者の姿を度々描いている。『眩人』では仏教僧・玄昉が、幻術と麻薬で朝廷を意のままに操る。『霧の会議』の司祭パオロ・アンゼリーニは大人数の聴衆に向かって語り掛ける聖職者であるが、裏で金品を授受する雇われの聖職者に過ぎない。また遺作となった「神々の乱心」では新興宗教の教団「月辰会」の平田有信が宗教を使って、宮中の権力を手中にしようとする姿を描いた。

シャーシャもまた聖職者の姿を描いた作家であった。宗教が本来の神聖さを失って、世俗化することに批判の眼差しを向ける。シャーシャの疑問は、1946 年に起こったある不条理な裁判にある。2 人の被告がいた。ひとりは農夫で、備蓄倉庫に持っていく小麦を 2~3 キンタルほど手元に置いたのだ。もう一人はカトリック司祭長で 15 キンタルの小麦を隠した。農夫は有罪となり 2 年の拘留刑となったが、司祭長は無罪となった。なぜなら弁護士が主張するところによると、司祭長は最終的には必要な人に分け与えるためだったというのだ(OBⅡ：XXXⅡ-XXXⅢ)。

1966 年の『人それぞれに *A ciascuno il suo*』は、医師が殺害された謎を追う推理小説仕立ての中編である。犯罪の手がかりとなった脅迫状の文字に、「人それぞれに」というラテン語の副題がついているカトリックの新聞『オッセルバトーレ・ロマーノ』の切り抜きが使われる。この新聞は村で 2 軒しかとっておらず、そのうちの一軒が司祭長であり、彼は殺害された医師の妻とは親族関係にあった。また、医師の妻は従兄である弁護士と長いあいだ愛人関係にあり、その関係に気づき脅迫した夫が殺害されたのであった。つまり、医師の妻、弁護士、司祭長はいずれも親族同士であり、やがて医師の妻と弁護士は司祭長のもとで結婚式を挙げる。カトリック教会の推進する家族制度を元に富の保持が図られ、教会が犯罪者に手を貸す姿を描いている。

遺作となった「小さなマフィアの話 *Una storia semplice*（原題：単純な話）」では司

祭が犯罪に手を貸していることを匂わせたものであった。罪を疑われた男が無罪放免となって警察署を出たとき一人に司祭とすれ違う。見覚えのある顔でどこであったのだろうかと男が記憶を辿り、犯罪現場付近ですれ違った男であることを思い出す。しかし犯罪に巻き込まれるのはごめんだとそのまま去ってしまう。聖職者が犯罪に手を染め、さらに罪を問われずにいる現実を書いている。

シャーシャの聖職者に対するまなざしは、アントニオ・グラムシが 1926 年の「南部問題、および共産主義・社会主義者・民主主義者の南部問題をめぐる姿勢にかんする覚え書き[32]」で書いた姿と一致する。

> 聖職者は知識人の社会集団に属しているため、南部の聖職者全般と北部聖職者との特徴的な相異に注目する必要がある。北部の司祭は共通して職人もしくは農民の息子であって、庶民感覚（sentimenti democratici）をもち、南部の聖職者よりも農民大衆につよく結びついている。女性としばしば公然と同棲している南部の司祭よりも道徳的にまっとうである。したがい、社会的にはより完全な霊的責務をはたしている。すなわち家庭にかんする活動すべての導き手である。北部では、国家と教会の分離ならびに［国家による］教会財産の収用は、南部よりもより徹底していた。南部では教区教会や修道院が相当の動産と不動産を保持もしくは再建したのだった。南部では司祭は次のような形で農民のまえにあらわれる。（１）農民が地代をめぐって衝突する当の土地管理人として。（２）極度に高い利率を要求し、宗教の力を悪用して地代や暴利を確実に徴収する高利貸しとして。（３）俗っぽい欲心（女とカネ）に支配され、それゆえ霊的に思慮分別と公正の点で信用ならない人物として。よって、告解はほとんど導きの聖務をはたしておらず、南部農民は、異教的意味でしばしば迷信家ではあっても、聖職者を支持しない。こうしたことすべてから、南部において（シチリアの一部地域を除き）人民党（Partito Popolare）がなぜ重要な地位を獲得できず、大衆の団体・組織網をひとつももちえないか、説明がつく。聖職者（clero）に対する農民の態度はつぎの俚諺に要約される。「司祭は祭壇では司祭だが、祭壇を降りればただの人」。
>
> （Gramsci 1926／藤岡訳 2009: 17）

さらにグラムシの「獄中ノート」では聖職者の言及は以下のように現れる。

> §〈52〉聖職者の社会的出自。聖職者の社会的出自は、聖職者の政治的影響力を判断するのに重要である。聖職者は、北部では、民衆（職人や農民）の出〈である〉。南部では、より以上に「紳士」や上流階級と結びついたもの＜である＞。南部と島

---

[32] 藤岡寛己訳出は、グラムシが 1926 年に書いたオリジナルタイトル *Note sul problema meridionale e sull' atteggiamento nei suoi confronti dei comunisti, dei socialisti e dei democratici* のビッショーネ（Francesco M. Biscione）による 1990 年の校訂版を採用している。なお一般的に流通しているタイトルは 1930 年 1 月に『労働者国家（スタート＝オペライオ）』 誌上に掲載されて以降認知されてきた「南部問題にかんするいくつかの主題（テーマ）」*Alcuni temi della quistionario meridionale* である(Gramsci 1926／藤岡訳 2009: 21)。

部では、聖職者は、あるいは個人として、あるいは教会の代表者として、莫大な地所をもち、高利貸しに精を出している。農民にはしばしば、精神の嚮導者のように思われるだけでなく、小作料（「教会の利益」）に依存する地主のように思われ、世俗的武器だけでなく精神的武器をも駆使できる高利貸しのように思われる。それゆえ、南部の農民は、地元出身の司祭をほしがり（なぜなら、司祭が知人であればそれほど厳しくないからであり、司祭の家族がある種の標的になって調停の要素として加わるからである）、ときとして教区民の［教区司祭］選挙権を要求する。（獄中ノート翻訳委員会 1981: 165）

一般人が聖職者に求める姿は、霊的役割と知識人としての役割である。しかしもはや霊的責務を果たさず、世俗化して近親者に便宜をはかる聖職者に対して、シャーシャは辛辣なメッセージを送っているのである。「貧者のための教会」が、富を築く手段であることに皮肉を込めている。

第 3 節 冷戦構造を描いた文学

松本清張とレオナルド・シャーシャの近似性の要因は、近代以降の日伊の社会的類似が重なったためだと考えられる。そして執筆した時期はアメリカを中心とする資本主義陣営とソビエトを中心とする社会主義陣営の対立期とも重なり、冷戦時代の資本主義社会を描いた作家であるといえる。作家デビューがともに 1950 年で、シャーシャが 1989 年に亡くなり、松本清張は 1991 年と、両作家の死は奇しくも冷戦の終結と前後している。

近代以降日本とイタリアの歴史的歩みは似ている。遡ること 19 世紀には新政府が確立され、第二次世界大戦では全体主義下となり、そして戦争が終わったときには敗戦国としてスタートした。戦後復興や 1950 年代後半からの高度経済成長、そして社会問題が持ち上がったが、これらの時期は両国でほぼ一致している。また、戦後の一党による長期政権も両国に共通した特徴である。

これら両国のあゆみをふまえると、清張とシャーシャはいずれも、作家になる前は社会に出て働き、デビュー後の 1950 年代に戦後復興から経済成長への転換を経験し、1960 年前後に作家としての地位を確立したのだといえる。

松本清張の『日本の黒い霧』（1960 年）はアメリカ占領下において、次々と起こった不可解な事件がアメリカ軍の撤退とともに止んだことに、米ソの緊張が関与していたのではないかと疑った。日本という土壌で、日本人が事件の背景に気づかないうちに冷戦の被害者となっている事実に憤りを覚えてのことだ。時代的な背景が両者の近似性となっていると考えられる。

イタリアにおいても冷戦による均衡が図られていた。シャーシャは 1974 年 1 月『エスプレッソ』誌のインタビューで、冷戦について次のように言及している。

均衡。我々が均衡と呼んでいる均衡や平和は、大きな支配者がヤルタで行った分割に基づいています。こちらはアメリカの影響力が強い区域で、あちらはソビエトの影響力が強い区域、それ以外はありません。もしこの均衡を妨げられるとしたら、戦争が

あるかもしれません。この危険の前には、均衡を保っておくほうが好ましいのです。欠陥があり恐ろしいものであるにも関わらず。（OBⅡ：XLⅡ）

シャーシャの文学作品は、先述した「スターリンの死」や「撤去」など、冷戦の図式を伴っているものが多い。

法政治学者でもあり政治学者でもあるノルベルト・ボッビオが『イタリア・イデオロギー *Profilo ideologico del Novecento italaiano*』(1986 年)にて、戦後のイタリアの知識人や文学について以下の見解を示している。

> 解放後最初の 20 年の歴史が、もし書かれていたら、同じコントラストが見うけられる叙述になったことだろう。政治の面からいえば、この時期は「キリスト教民主党支配の 20 年」と呼ぶほかないだろう。しかしながら、文化の面は、キリスト教民主党支配の反対であった。この時期を彩ったのは、マルクス主義、レーニン主義、グラムシ主義、はてはスターリン主義であった。そしてまた、新啓蒙主義、敬虔主義、プラグマティズムであり、実証主義や社会学の普及であり、急進自由主義、急進マルクス主義、急進カトリシズムの登場であった。（ボッビオ　訳 1993: 296）

ボッビオの見解には、冷戦構造におけるイタリアのバランスや均衡感覚といったものが浮かび上がってくる。

さらに宗教においても冷戦構造は大きな影響を与えてきた。ヨハネ・パウロ 1 世の後、1978 年 10 月に新しいローマ教皇がコンクラーベによって選出された。クラクフ大司教のカロル・ヴォイティワが、教皇ヨハネ・パウロ 2 世（在位 1978 年 10 月～2005 年 4 月）として就任したのだ。共産圏東ヨーロッパにあって最大のキリスト教信者を抱えていたポーランド出身であり、非イタリア人の教皇としては 450 年ぶりで、それ自体が歴史的であった。27 年におよぶ在位期間に各国を訪れ「空飛ぶ教皇」としても知られる。1979 年 6 月ヨハネ・パウロ 2 世は自国のポーランドを訪問し、東西冷戦を終わらせる礎となったと言われている。1981 年 5 月 13 日サン・ピエトロ広場でヨハネ・パウロ 2 世暗殺未遂事件が起きていて、教皇の共産圏への影響を恐れたソ連の国家保安委員会（KGB）やルーマニアや東ドイツの諜報機関が関与したのでないかと当時から言われていた。（松本 2013: 193-194）。

なおヨハネ・パウロ 2 世亡き後に選出されたドイツ人教皇ベネディクト 16 世の生前退位により、2013 年にアルゼンチン出身の枢機卿がローマ教皇に選出された。イタリア系移民のフランシスコ教皇で本名はホルヘ・マリオ・ベルゴリオ（1936-）である。教皇名は清貧と謳われているイタリア中部アッシジの聖フランチェスコにちなんでいる。教会の不祥事や欧米以外の地域でカトリック信者が増え続ける現状、さらに非イタリア人の教皇が続いたあと、次はイタリア人教皇を選出したいというヴァチカンの保守派を安心させるため、白羽の矢が立ったのがイタリア系移民のブエノスアイレス大司教ホルヘ・マリオ・ベルゴリオであったと言われている。ラテン・アメリカという地域柄が「精神武装世界会議」「P2」と似た流れを思わせなくもない。ローマ教皇の選出には政治的思惑も絡んでいるのである。出身のラテン・アメリカは、キリスト教社会主義とも言われる解放の神学の拠点でもある。

フランシスコ現ローマ教皇の選出は、様々な意味において、カトリックの時代との向き合い方を象徴する出来事であったといえる。カトリック信者が増加した開発途上国の出身であること[33]、イタリア系移民であること、解放の神学の拠点であるラテン・アメリカ出身であることなど、時代に合わせて生き残りを図ってきたカトリックの姿なのである。

フランシスコ教皇は、17 世紀から 18 世紀にかけて南米における布教が成功したイエズス会出身である。アンドレアス・ファルクナーはイエズス会の活動について以下のように書いている。

> イエズス会員たちは武器を持たずにやってきて、インディオの言葉を学び、文法書や辞書を編纂し、様々な方言を統一した書き言葉にまとめた。[南米におけるイエズス会の伝道所レドゥッシオーネス（reducciones 原住民指定地の意味）が－引用者] ヨーロッパ社会主義の精神史へ与えた影響は、無視することはできない。レドゥッシオーネスの体制の背後にあったイデオロギーについては、多くのことが謎に包まれたままであった。それは「キリスト教的共産主義」であったのだろうか。それは「社会的ユートピア」の実現であったのか。イエズス会員たちはあらかじめ決められた理論にしたがって理想的国家を建設しようと考えたのではなかった。会員たちの関心事は、ただインディオがキリスト教に改宗することであった」（ホッグ編 訳 2014: 484- 486）

このファルクナーの記述は興味深い。シャーシャとフランシスコ教皇の思想には似た点が多く、ひとつの世界的思想の流れと言えるのかもしれない。フランシスコ教皇は自身が「社会派」と呼ばれることに対し、聖書に拠っていると述べている。

小結

以上、松本清張とレオナルド・シャーシャの近似性を『トード・モード』を中心に考察してきた。『トード・モード』は、戦後イタリアを牽引していたキリスト教民主党の在り方が問われている作品であった。第二次世界大戦後の一党による長期政権は日本にも言えることである。1970 年にシャーシャがシチリア島のサレジオ会経営のホテルで見た奇妙な「霊操」が、『トード・モード』の構想につながった。ただの「霊操」だったとしても、その背後にうごめくキリスト教民主党の「クリエンテリズモ（縁故主義、恩顧と依存の関係）」のつながりを嗅ぎ取っていた。修道院は宗教を蓑に利権分配を行う場所である。『トード・モード』は P2 発覚や汚職を予見した、キリスト教民主党の告発の書である。

両者の近似性は、宗教的蠱惑の普遍性を描いたことや、現実の聖職者への批判的なまなざしにも見て取れる。社会背景として、冷戦構造の「均衡」の中で書いた作家であるということが、一連の作品群となって現れているのである。

---

[33] ヨハネ・パウロ 2 世の在位期間中(1978-2005)に、1978 年に 3 億 4000 万人だったカトリック信者が 2005 年には 11 億人となった。アメリカやヨーロッパでキリスト教離れが進む中、開発途上国でカトリック信者が増加したことによる。（松本 2013: 228-229）

イタリアにおける松本清張関連リスト

La lista di Matsumoto Seicho in Italia

[Traduzioni]　翻訳

1971　*La morte è in orario* 点と線, trad. Mario Teti, Mondadori.(n.1149)

1989　*Come sabbia tra le dita* 砂の器, trad. Mario Morelli, Arnoldo Mondadori.(n.2112)

1998 *Il palazzo dei matrimoni* 黒い空, trad. Lydia Origlia, Arnoldo Mondadori.(n.2570)

[I giornali]　新聞

La Stampa

I preliminari di armistizio fra Stati Uniti e Nord Vietnam, Stampa Sera, p15, lunedì 8 -martedì 9 aprile 1968.

Tutti (o quasi) a Venezia, La Stampa, p7, mercoledi 19 agosto 1970.

Il paese delle nebbie nere, La Stampa, p3, venerdì 8 giugno 1973.

Persone di Lietta Tornabuoni, La Stampa, p2, 13 agosto 1981.

Misteriosi sacchi pieni di yen in un boschetto di bambù, La Stampa, p5, 18 aprile 1989.

Matsumoto Seicho re dei gialli, La stampa, p2, giovedì 29 maggio 1997.

Addio a Nomura, La Stampa, p31, domenica 10 aprile 2005.

Corriere della sera

Un cugino di 007: Due polizieschi ambientati in Giappone, Corriere della sera, p13, Domenica 21 febbraio 1971.

Gazzettino

Il festival, giorno per giorno, venerdi 14 agosto 1970, p12, Gazzettino.

Ewa Swann: l'esotica bergamasca, Gli altri programmi, p11, Gazzettino

Spettacoli, giovedi 20 Feb 1970, p12, Gazzettino.

La Gazzetta del Mezzogiorno

Non title, 07 aprile 1968, p1, *La Gazzetta del Mezzogiorno*

I nord-vetnamiti pronti a partire: per Ginevra, 08 aprile 1968, *La Gazzetta del Mezzogiorno*

Non title, 07 aprile 1968, p1, *La Gazzetta del Mezzogiorno*

Passerella del Lido, 21 agosto 1970, p3.

L'Unità

A Ginevra o Phnom Penh gli incontri USA-RDV?, lunedì aprile 1968, ページ数不明

Il calendario, in spettacolo, mercoledì 19 agosto 1970, p7.

[Il cinema] 映画

Regia: Nomura Yoshitaro 野村芳太郎監督作品 ▸松本清張原作作品は全 7 本

『張込み』(1958) *Harikomi [Stakeout, La caccia]* 2008 年 DVD 販売 Raro video

『影の車』(1961) *Ruota di ombre* 1970 年ヴェネチア国際映画 祭上映

『砂の器』(1974) *Castello Sabbia*

『鬼畜』(1978) *Kichiku [The demon]* 2008 年 DVD 販売 Raro video

『疑惑』(1982) *Il sospetto* 1986 年 3 月 5 日・12 日ローマ日本文化会館にて上映

Regia: Suzuki Seijun 鈴木清順監督作品

『影なき声』(1958) *La voce senz'ombra*

1996 年 11 月 8 日 ローマ日本文化会館にて上映

Regia: Inudou Isshin 犬童一心

『ゼロの焦点』(2009) *Zero Focus*

2010 年極東映画祭 Il Far East Film festival に出品

引用参考文献

松本清張 テクスト

1971 『松本清張全集 1 点と線』文藝春秋.

1971 『松本清張全集 5 砂の器』文藝春秋.

1974 『松本清張全集 34 半生の記　ハノイで見たこと　エッセイより』文藝春秋.

1972 『松本清張全集 30 日本の黒い霧』文藝春秋.

1995 『松本清張全集 61 霧の会議』, 文藝春秋.

1990 『黒い空』角川書店.

1971 *La morte è in orario* 点と線, trad. Mario Teti, Mondadori.

1989 *Come sabbia tra le dita* 砂の器, trad. Mario Morelli, Mondadori.

1998 *Il palazzo dei matrimoni* 黒い空, trad. Lidia Origlia, Mondadori.

2013 『松本清張記念館図録』, 北九州市立松本清張記念館.

Sciascia, Leonardo.　レオナルド・シャーシャ　テクスト

1976 『権力の朝』, 千種堅訳, 新潮社.

1976 『マヨラナの失踪ー消えた若き天才物理学者の謎』千種堅訳, 出帆社.

1979 『モロ事件』, 千種堅訳, 新潮社.

1987 『真昼のふくろう』, 竹山英博訳, 朝日新聞社.

1994 『ちいさなマフィアの話』, 武谷なおみ訳, 白水社.

2011 『短篇で読むシチリア』, 武谷なおみ編訳, みすず書房.

OB Ⅰ Leonardo Sciascia, *Opera* (1956-1971), 7ed, a cura di Claude Ambroise.vol. Ⅰ. Milano, Bompiani, 2004.

OB Ⅱ Leonardo Sciascia, *Opera* (1971-1983), 6ed, cura di Claude Ambroise.vol. Ⅱ. Milano, Bompiani, 2004.

OB Ⅲ Leonardo Sciascia, *Opera* (1984-1989), 6ed, a cura di Claude Ambroise. vol. Ⅲ. Milano, Bompiani, 2004.

OA Ⅰ Leonardo Sciascia, *Opera* (Narattiva-Teatro-Poesia), a cura di Paolo Squillacioti, vol.I, Milano, Adelphi edizione, 2012.

OA Ⅱ Leonardo Sciascia, *Opera* (Inquisizioni-Memorie-Saggio), a cura di Paolo Squillacioti, vol. Ⅱ, Milano, Adelphi edizione, 2014.

1953 *Letteratura del «giallo»*, in *«Letteratura»* Maggio-Giugno, Roma, De duca, 65-67.

1954a *Appunti sul «giallo»*, in *«Nuova corrente»* Giugno, Genova, Tilgher, 23-34.

1954b La carriera di Maigret, in *«Letteratura»* Luglio-Agosto Numero 10, De Luca.

1975a Breve storia del romanzo giallo:1, in *Epoca,* 20 settembre, Milano, Mondadori, 62-72.

1975b Breve storia del romanzo giallo:2, in *Epoca*, 27settembre, Milano, Mondadori, 60-66.

1991 *Quaderno*, Palermo, Nuova Editrice Meridionale s. r. l.

1995 *Todo modo*, Adelphi.

全般

共著
1998　『イタリア文学史』岩倉具忠他, 3 刷, 東京大学出版会.
2003　『松本清張の世界』文藝春秋編, 文藝春秋.
2008　『新版世界各国史 15　イタリア史』北原敦編, 山川出版社.
2010　『キリスト教の歴史－現代をよりよく理解するために』アラン・コルバン編／浜名優美監訳, 藤原書店.
2011　『イタリア文化事典』公益財団法人日伊協会監修, 丸善出版.
2013　『松本清張記念館図録』, 北九州市立松本清張記念館.
2014　『修道院文化史事典』P.ディンツェルバッハー・J.L.ホッグ編／朝倉文市監訳、八坂書房.

上村忠男
2009　『現代イタリアの思想をよむ：[増補新版]クリオの手鏡』, 平凡社.

加納重文
2005　『松本清張作品研究』和泉書院, 近代文学研究叢刊.

倉科岳志
2010　『クローチェ 1866-1952：全体を視る知とファシズム批判』, 藤原書店.

越前貴美子
2012　「シチリアの片隅から世界へ―編集者レオナルド・シャーシャ―」『和田忠彦先生還暦記念論文集』, 土肥秀行 橋本勝雄 住岳夫 編, 双文社印刷.

権田萬治
2009　『松本清張 時代の闇を見つめた作家』, 文藝春秋.

松本佐保
2013　『バチカン近現代史―ローマ教皇たちの「近代」との格闘―』, 中央公論新社.

武谷なおみ
1981　「レオナルド・シャーシャの告発と希望―イタリアはシチリア化している―」『地中海学研究』IV.
1986　「見えない女性達を求めて―現代シチリア文学におけるマンミズモと母権性―『日伊文化研究第 24 号』, 日伊協会.
1999　「＜牛の眼＞で見たシチリア―レオナルド・シャーシャの文学と家族―」『日伊文化研究第 37 号』, 日伊協会.

2000　『イタリア覗きめがね　スカラ座の涙，シチリアの声』，日本放送出版協会.

竹山博英
1982　対談・竹山博英訳・聞き手「テロ・マフィア・失業……それでもわが国は倒れない—現代イタリア作家 L・シャーシャ氏が語る社会の自画像—」『朝日ジャーナル 7 月 16 号　VOL.24 NO.30』，朝日新聞社.
1985　『シチリア　神々とマフィアの島』，朝日新聞社.
1988　『マフィア　シチリアの名誉ある社会』，朝日新聞社.
1991　『マフィア・その神話と現実』，講談社.
1994　『シチリアの春－世紀末の文化と社会－』，朝日新聞社.
1994　「南イタリアの親族関係と組織犯罪」『日伊文化研究第 32 号』，日伊協会.

橋本勝雄
2003　「文学と真実　レオナルド・シャーシャ『モーロ事件』」『言語文化 20 号』，明治学院大学言語文化研究所.

馬場康夫
2008　「『霧の会議』の背景」『松本清張研究』，第九号北九州市立松本清張記念館.

原口隆行
1999　『イタリア＝鉄道旅物語』，東京書籍.

藤澤房俊
1988　『シチリア・マフィアの世界』，中央公論社.

保阪正康
2006　『松本清張と昭和史』，平凡社新書.

堀啓子
2014　『日本ミステリー小説史 黒岩涙香から松本清張へ』，中公新書.

柳原暁子
2014　「松本清張 翻訳論—その受容と世界文学へのまなざし—」『松本清張研究』第十五号北九州市立松本清張記念館.

結城昌治
2008　『長い長い眠り』，東京創元社.

吉村 法子
2010 「レオナルド・シャーシャの文学 —探偵小説の解体とマフィア—」立命館文學 616

号，立命館大学人文学会.
2016　「レオナルド・シャーシャとジャーナリズム」立命館文學 648 号，立命館大学人文学会.

パスクァーレ・アッカード
1999　『シャーロック・ホームズが誤診する』高山宏訳，東京図書.

フランチェスカ・アンブロジェッティ／セルヒオ・ルビン
2014　『教皇フランシスコとの対話－自らの言葉で語る生活と意見』八重樫克彦／八重樫由貴子訳，新教出版社.

ウンベルト・エーコ／トーマス.A. シービオク編
1990　『三人の記号：デュパン，ホームズ，パース』，東京図書.

ラリー・カーヴィン
1985　『誰が頭取を殺したか』飯島宏訳，新潮社.

アンドレア・カミッレーリ
1999　『モンタルバーノ警部　悲しきバイオリン』千種堅訳，角川春樹事務所.
2000　『おやつ泥棒　モンタルバーノ警部』千種堅訳，角川春樹事務所.

カルロ・ギンズブルグ
1988　『神話・寓意・徴候』竹山博英訳，せりか書房.
1992　『裁判官と歴史家』上村忠男訳,平凡社.

アントニオ・グラムシ
1981　『グラムシ獄中ノート I』獄中ノート翻訳委員会訳，大月書店.
2009　「南部問題、および共産主義者・社会主義者・民主主義者の南部問題をめぐる姿勢にかんする覚え書き」，藤岡寛己訳，『福岡国際大学紀要』No.22, 9-31.
2011　『グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅶ　歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』松田博訳，明石書店.
2011　『知識人と権力：歴史的－地政学的考察』上村忠男訳，みすず書房.
2013　『グラムシ『獄中ノート』著作集Ⅲ　知識人とヘゲモニー「知識人論ノート」注解』松田博訳，明石書店.

ロベルト・サヴィアーノ
2011　『ゴモラ　世界の裏側を支配する暗黒帝国』大久保昭男訳，河出書房新社.

エドワード・サイード
1998　『知識人とは何か』大橋洋一訳，平凡社.

アンドレ・ジッド
1963　『贋金つくり（下)』川口篤訳，岩波書店.
1999　『アンドレ・ジッド代表作選 第2巻ソチ』若林真個人訳，慶応義塾大学出版会.

イヴ・シュヴァレル
2009　『比較文学入門』小林茂訳，白水社.

アントニオ・タブッキ
1996　『供述によるとペレイラは……』須賀敦子訳，白水社.
1999　『ダマセーノ・モンテイロの失われた首』草皆伸子訳，白水社.

イグナチオ・デ・ロヨラ
1995　『霊操』門脇佳吉訳・解説，岩波書店.

G.ナポリターノ／E.J. ホブズボーム
1976　『イタリア共産党との対話』山崎功訳，岩波新書.

シルヴィオ・ピエルサンティ
2007　『イタリア・マフィア』，朝田今日子訳，ちくま新書.

フォイエルバッハ
2016　『キリスト教の本質（上)』船山真一訳，第45版，岩波書店.
2016　『キリスト教の本質（下)』船山真一訳，第37版，岩波書店.

教皇フランシスコ／ラビ・アブラハム・スコルカ
2014　『天と地の上で　教皇とラビの対話』八重樫克彦／八重樫由貴子訳，ミルトス.

ジャン・ピエロ・ブルネッタ
2008　『イタリア映画史入門 1905－2003』川本英明訳，鳥影社.

レジーヌ・ペルヌー
2002　『テンプル騎士団の謎』池上俊一監修／南條郁子訳. 創元社.

ノルベルト・ボッビオ
1993　『イタリア・イデオロギー』馬場康夫／押場靖志訳，未來社.

ダーチャ・マライーニ
1996　『声』大久保昭男訳，中央公論社.

フォスコ・マライーニ
2009　『随筆日本　イタリア人の見た昭和の日本』温田温司監訳，松籟社.

カール・マルクス
2010　『ユダヤ人問題によせて／ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳,第 30 版,岩波書店.

デイヴィット・ヤロップ
1985　『法王暗殺』徳岡孝夫訳，文藝春秋.

AA.VV.,
1997　*Storia del giornalismo italiano: Dalle origine ai giorni nostri*, Giuseppe Frinelli[et al.] , UTET Libreria.
1998　*La memoria di carta: Bibliografia delle opere di Leonardo Sciascia*, a cura di Valentina Fascia con scritti di Francesco Izzo e Andrea Maori, Milano, Edizioni Otto/Novecento.
2003　Istituto Italiano per L'Africa e L'Oriene Roma Università degli Studi di Napoli "Orientale", *Italia- Giappone 450 anni*, vol. 2, a cura di Adolfo Tamburello, Roma- Napoli, Il Torcoliere.
2004　*Il giallo italiano:come nuovo romanzo sociale*, a cura di Marco Sangiorgi e Luca Telò, Longo editore.
2005　*Letteratura giapponese II : Dalla fine dell'Ottocento all'inizio del terzo millennio*, a cura di Luisa Bienati, Einaudi.
2006　*Sciascia, il romanzo quotidiano*, 2.ed., a cura di Egle Palazzolo, Palermo, Kalós.
2007　*L'enciclopedia di Leonardo Sciascia: caos, ordine e caso*, a cura di Pietro Milone, Milano, La Vita Felice.
2007　Letteratura italiana, Istituto Geografico De Agostini.
2011　*Troppo poco pazzi: Leonardo Sciascia nella libera e laica Svizzera*, a cura di Renato Martinoni, Firenze, Leo S. Olschki editore.
2012　L'esordio dei Gialli Mondadori: da fortunata scelta editoriale all'esplosione di un genere letterario, a cura di Emanuela D'Alessio, Oblique Studio.
http://www.oblique.it/images/formazione/dispense/esordio-gialli-mondadori.pdf
(2016.10.29 取得)

Ajello, Nello
1986　*Lezioni di giornalimo : com'e cambiata in 30 anni la stampa italiana, 2ed.* Garzanti.

Ambroise, Claude.
2000　*Invito alla lettura di Sciascia*, 10ed, Mursia.

Beviglia, Rosaria.
1966 *La letteratura giapponese in Italia parte I 1871-1950*, «Il Giappone», AnnoⅥ, 7-26.
1967 *La letteratura giapponese in Italia parte II 1950-1967*, «Il Giappone», Anno Ⅶ, 149-161.

Boscaro, Adriana.
2000 *Narrativa giapponese. Cent'anni di traduzioni*, Venezia, Cafoscarina.
（邦題『イタリア語になった日本文学 100 年のあゆみ』）

Castagnino, Angelo.
2014 *The intellectual as a detective: From Leonardo Sciascia to Roberto Saviano*, New York, Peter lang.

Cremante, Renzo.
2006 *Vicende del giallo italiano*, Cultura Italo-Giapponese, 3, 29-42. 東京大学フィレンツェ教育研究センターWebサイトより取得. http://repository. dl. itc. u-tokyo. ac. jp/dspace/bitstream/2261/5067/3/cg003003. pdf (2016/2/1)

Collura, Matteo.
2007 *Il maestro di Regalpetra vita di Leonardo Sciascia* , Milano, Longanesi.

Francese, Joseph.
2012 *Leonardo Sciascia e la funzione sociale degli intelletuali*, Firenze University Press. [Kindle 版]

Rambelli, Loris 1979, *Storia del «giallo» italiano*, Garzanti, 47-72.

Tani, Stefano.
1984 *The doomed detective: The Contribution of the Detective Novel to Postmodern America and Italian Fiction*, Carbondalein USA, Southern Illinois University Press.
1990 『やぶれさる探偵　推理小説のポストモダン』, 高山宏訳, 東京図書.

Macaluso, Emanuele.
2010 *Leonardo Sciascia e i comunisti*, Milano, Feltrinelli.

Motta, Antonio.
2009 *Bibliografia degli scritti di Leonardo Sciascia*, Palermo, Sellerio Editore.

Onofri, Massimo.
2004 *Storia di Sciascia*, Roma, Laterza.

Orsi, Maria Teresa.
1961 *Gli antecedente racconto poliziesco in Giappone e l'innesto del mystery occidentale,* Il Giappone, p65-83, Cultura Italo-Giappone.

Squillacioti, Paolo.
2008 *L'alba del giorno della civetta: Il silenzio di Sciascia*, «Per leggere», n14-primavera, pp.59-78

Teti, Mario.
19- *Letteratura giapponese moderna e contemporanea,* 291-328.

Traina, Giuseppe.
1999 *Leonardo Sciascia*, Milano, B. Mondadori.
2009 *Una problematica modernità. Verità pubblica e scrittura a nascondere in Leonardo Sciascia*, Bonanno Editore.

Web サイト

新聞社デジタル・アーカイブ
L'Unità：http://archivio.unita.it/
Corriere della sera: http://archivio.corriere.it/Archivio/interface/landing.html
La stampa: http://www.lastampa.it/archivio-storico/

シチリア州立図書館サイト
http://mw.bibliotecacentraleregionesiciliana.it/index.php?it/334/archivio-lora

Fondazione Istituto Gramsci onlus サイト
http://guida.archivigramsci.it/

Il Romanzo mensile について（201611.29）
http://www.genovalibri.it/corriesera/rommens_1.htm
http://www.lfb.it/fff/editoria/rommens03-10.htm

第17回　松本清張研究奨励事業研究報告書

発行日　平成 29(2017)年 3 月 31 日発行

【編集・発行】

北九州市松本清張記念館

北九州市小倉北区場内 2 － 3

TEL.093-582-2761

【印刷・製作】

有限会社　シーズ

本報告書掲載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。
松本清張記念館ホームページ　http://www.kid.ne.jp/seicho
登録番号　北九州市印刷物登録番号　第１６０９１５３Ｆ